

京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

山 本 真 吾

目 次

- 一、序
- 二、書誌の概要
- 三、構成
- 四、所収表白の作者について

一、序

此度、京都女子大学図書館御当局の御許可を賜り、第一一七九五七・一一七九五八・一一七九五九号として所蔵されている表白集三冊の写真を掲載して大方に紹介出来る事となった。この書は、第一・第四・第六のみの零本であるが、鎌倉中期頃の書写と目され、表白集の成立発達の研究に關して逸すべからざる文献であり、仏教史学・国語学・日本漢文学等の諸学にとつて重要な資料であると思われる。ここに以下、簡単ながら解説を付しておくこととする。

二、書誌の概要

本書は、京都女子大学架蔵になつてから改装されて、美濃判横綴の冊子の形をし、納戸色緞子地表紙となつているが、原装は、三冊共、豎半切の袋綴であつたと見られる。(1)恐らく紙背が容易に見られるように袋になつている所を開綴し、裏表

仮名字体表

①表白集第一（各欄内、上段が一次仮名、下段が二次仮名）

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン		ラ	ヤ	ア	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	ア	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
置符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ス、ム	キ	リ				ニ	チ	シ	キ	イ
	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
コ、ニ		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ル		ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
	レ			ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	
ヲ		ヨ	モ	ホ		ト		コ	オ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	

②表白集第四

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
置符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
夕	井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
夕		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
夕		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
夕	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
夕	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
夕	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
夕	シ		ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

③表白集第六

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	マ フ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
疊符	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ツム		リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
					ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

見られる横綴としたものであろう。) 原装は、打付けに「表白集第一」「表白集第四」「表白集第六」とそれぞれ外題されていたと考えられる。次丁に、「表白集第一」結縁灌頂三昧耶戒 同初夜「表白集第四」塔供養付泥塔 堂供養「表白集第六」修法 護摩 供養法と内題が記され、その下に「京都女子大学蔵書」の朱印を捺す。料紙は楮紙で、第一―二十一丁・第四―十九丁・第六―十四丁、縦二九・八糎・横四七・二糎、無界で字高二・五糎前後、一片面十八行、一行十八乃至二十字を記す。本文には墨筆で傍訓・返点・合符・声点が施されている。

本文は、三冊それぞれに別の手で書かれており、本文と傍訓の仮名等との関係は次の如くに判ぜられた(別掲仮名字体表参照)。

第一には、本文とは別筆の仮名が二種認められ、後筆の仮名は異本との校合の際に加えられた注記の字体と一致し、この時に加点されたものと見られる。第四の仮名は、一種であつて本文とは別に加えられたものであり、第六の仮名も一種であるが、これは本文と同手であると認められた。このように、書写の事情はそれぞれに異なっているようであるが、傍訓の仮名は、三冊共、ほぼ鎌倉中期頃(後期に近い頃か)と判断される。

尚、三冊共、書写識語等は見られない。

三、構 成

ここで、本書の構成について、二、三、私見を交えながら述べることにする。

まず、左に各冊の所収表白の標題並びに作者名を掲げる。また、参考として、異本との校合の際に注記(イ注記)が加えられている場合や他の文献に同一本文が見出せる場合にはその旨を記し、加えて、現段階で作成年代を推定し得た表白文については、その年月及び典拠を示すこととする。(1)(2)(3)、○印、①②等は筆者が仮に加えたもの)

(1)表白集第一 結縁灌頂三昧耶戒 同初夜
伝法灌頂初夜

○結縁灌頂三昧耶戒

①東寺灌頂三昧耶戒表白 寛信法務作

二才

(参考)

②觀音院灌頂三昧耶戒表白 故御室御作

二才

イ注記。

③同表白 同御作

四才

イ注記。

④同表白 御室御作

五才

イ注記。

⑤同表白 同御作

七才

イ注記。啓白諸句集⁽²⁾567行。

⑥同表白 敦経擬作

九才

本朝文集卷第六十二。

⑦尊勝寺灌頂表白 匡房卿作

十才

イ注記。本朝統文粹卷第十二。長治元年(一一〇四)三月二十四日(本朝統文粹卷第十二の年紀)。

○結縁灌頂初夜

⑧東寺灌頂初夜表白 寛信法務作

十一才

⑨觀音院灌頂初夜表白 故御室御作

十二才

⑩同表白 御室御作

十三才

⑪同表白 同御作

十四才

○伝法灌頂初夜

⑫御室御灌頂初夜表白 故御室御作

十五才

イ注記。仁安三年(一一八六)四月十二日(仁和寺御伝)⁽⁴⁾。

⑬宮御灌頂初夜表白 御室御作

十七才

イ注記。啓白諸句集419行。元暦元年(一一八四)十一月五日(仁和寺相承秘記)⁽⁵⁾。

五日(仁和寺相承秘記)。

⑭仁性律師伝法灌頂初夜表白 故御室御作

⑮寛紹伝法灌頂初夜表白 寛信法務作

(2)表白集第四塔供養付泥塔 鎮壇 堂供養

○塔供養付泥塔

①院御塔供養表白 敦周擬作

②塔供養表白 施主并作者可尋之

③故御室八万四千基泥塔供養表白 勝賢僧正作
于時僧都

○堂供養

④鳥羽證金剛院供養表白 中御室作

⑤鳥羽炎魔天堂供養表白 寛信法務作

⑥上西門院北山三昧堂供養表白 故御室御作

(付) 仏釈所褒

⑦蓮華心院供養表白 御室御作

⑧花蘭左大臣堂供養表白 寛信法務作

⑨美作守頭能法性寺堂供養表白 (任之) 同人作

十八才
イ注記。仁安三年(一一六八)二月十一日(御室相承記)⁽⁶⁾。
二十才
高山寺本表白集⁽⁷⁾。保延六年(一一四〇)五月七日(高山寺本表白集の研究)⁽⁸⁾。

二才
本朝文集卷第六十二。⁽⁹⁾

四才
仁安四年(一一六九)年二月二十二日(御室相承記)。

六才
康和三年(一一〇二)三月二十九日(御室相承記)。

七才
醍醐寺本表白集⁽¹⁰⁾。

八才

十才
表白御草⁽¹¹⁾。承安四年(一一七四)二月二十三日(寛書)
建長六年書写 覚洞院法印親快筆 「表白御草」⁽¹²⁾。

十二才
醍醐寺本表白集⁽²⁾。

十三才
醍醐寺本表白集⁽²⁵⁾。

⑩奉為故二条院香隆寺御堂供養表白 敦經擬作

十四才

本朝文集卷第六十二。仁安元年（一一六六）七月二十六日（百鍊抄第七）。

⑪故御室奉為高野御室高野御堂供養表白 敦周擬作

十六才

本朝文集卷第六十二。仁平四年（一一五四）十二月六日（兵範記）。

⑫美作前司為亡女雲林院堂供養表白 寛信法務作

十八才

○鎮壇

⑬皇太宮興福寺御堂鎮壇表白 同人作

十八才

康治二年（一一四三）十二月二十日（本朝世紀第二十七）。

(3)表白集第六修法 護摩
供養法

○修法

①後七日御修法表白 寛信法務作

二才

醍醐寺本表白集(35)・高山寺本表白集(67)。

②中宮孔雀經御修法表白御座御祈
日触御祈 御室御擬作

二才

建久六年（一一九五）（本文末尾に年紀有り）。

③上皇仁王經御修法表白敦周擬作
敦周擬作

四才

④中宮薬師御修法表白御座御祈
明宗擬作

五才

○供養法

⑤東寺灌頂後朝供養法表白

寛信法務為
源運作之

六才

高山寺本表白集(10)。保延四年（一一三八）十月二十九日

（高山寺本表白集の研究）。

⑥觀音院灌頂後朝供養法表白 敦綱擬作

六才

⑦同表白 賢清作

七才

⑧南御室仏名後朝供養法表白 敦光為
範寛作之 八才

⑨同表白 匡隆為行任
作之 九才

⑩同表白 敦経擬作 十才

⑪同表白 賢清作 十一才

⑫八条院舍利供養表白 故御室御作 十二才

⑬聖鏤金剛界初行表白 自作 十三才

承安元年(一一七二)八月二十五日(大乘院寺社雜事記)¹⁶⁾

本書は、先に述べた如く零本であるので、全体の構成については詳細は不明とする他はないが、これによってその概観は凡そ知ることが出来る。すなわち、今、(1)表白集第一に注目すれば、これは内題からも知られるように、灌頂に関する法会の表白文を類聚したものと考えられ、そこに集められた十五篇の表白文を「結縁灌頂三昧耶戒」―七篇①～⑦、「結縁灌頂初夜」―四篇⑧～⑩、「伝法灌頂初夜」―四篇⑫～⑮)の三つに分類していることが知られる。更に、③～⑥、⑩⑪は「同表白」とあって、同類のものをまとめて配列していることがわかる。

⑩⑪は「同表白」とあって、同類のものをまとめて配列していることがわかる。¹⁷⁾
現存最古の表白集の写本としてよく知られている醍醐寺本表白集や高山寺本表白集の場合、部分的に同類のものを集めようとした痕跡は認められるものの、全体としては分類基準が不明確であり、雑とした観があることは否めないのに対して、本書の場合、この第一のみならず、第四・第六もおのおの法会の種別に基く部類がなされており、その中を、更に下位分類して、特に同類のものは、これをまとめて配列するといった、極めて整然とした構成を有していることが知られるのである。¹⁹⁾

又、右の中、最も古い表白文は、(2)④鳥羽證金剛院供養表白―康和三年(一一〇二)であり、最も新しい作は、年紀の示された(3)②中宮孔雀経御修法表白―建久六年(一一九五)であって、現段階で考証し得たものに限っても、この間約百

年ものひらきがあることが知られる。

この点に於いても、一一三〇年—一四七七年頃に集中している醍醐寺本や高山寺本とは異なり、本書は、時代的にも広範にわたって表白文を類聚・集成しようとした跡が窺われるのである。

四、所収表白の作者について

本書所収の表白文には、第四の②「塔供養表白 施主并作者可尋之」を除いて、すべて作者の名が明記されている。今、素姓のよくわからない明宗・聖鏝(各一篇)を除き、これらの人達を僧俗の別に分けて、収録篇数の多い順に掲げると次の如くなる。(括弧内の数字は収録篇数)

(1)僧侶

寛信法務(10) 故御室(7) 御室(7) 賢清(2) 中御室(1) 勝賢(1)

(2)儒者

敦経(3) 敦周(3) 敦光(1) 敦綱(1) 匡房(1) 匡隆(1)

このように、僧侶以外に儒者の名が多く見出せることも本書の重要な特色の一つであると思われる。

(1)では、故御室・御室・賢清・中御室(覚行法親王)といった仁和寺関係の僧の名が多く見える。本書第四③「故御室八万四千基泥塔供養表白」勝賢僧正作
于時僧都は、「御室相承記五紫金臺寺御室」の、

○於紫金臺寺、被供養八万四千基泥塔事、

〔四月八日改元嘉〕

仁安四年二月廿二日己酉、有此事、御導師勝憲僧都、請僧、六口

とある記事に相当すると考えられるので、右の「故御室」なる人物は、第五代の仁和寺門跡、紫金臺寺御室・覚性法親王⁽²¹⁾であることが知られる。又、「御室」は、本書第六の②「中宮孔雀経御修法表白」の末尾に、

○建久六年中宮御産時御室為用意有御擬作而宮令修御仍不被用此御草

と記されていることより、建久六年の時点で仁和寺御室であつた人物を「仁和寺御伝」にもとめると、第六代の喜多院御室・守覚法親王⁽²²⁾であることが判明する。(従つて、右の引用文の「宮」なる人物は、同じく「仁和寺御伝」の記事より、次代の後高野御室・道法法親王⁽²³⁾であることが知られる。)

他に、小野方の勸修寺法務寛信や醍醐寺僧勝賢の名も見えるが、寛信は、「追記」に、

○但外儀法則之事者。醍醐流ニハ。用ニ寛東院僧正記。勸修寺用ニ寛信法務記。 (群書類従・釈家部)

と記されており、守覚法親王が勸修寺の外儀法則を知る上で、彼の書を尊重していたらしいことがわかる。又、勝賢も、醍醐寺蔵本の「伝法灌頂師資相承血脉」に、

8才・三宝院流

蒸通・付法九人
権僧正勝賢——「号御流」・守覚「重」北院御室 (醍醐寺文化財研究所「研究紀要」第一号〈昭和53年・法蔵館〉)

とあり、守覚法親王の師であることが知られるのであつて、小野流の僧とは言え、二人共守覚法親王と何らかの交渉のあつたらしいことが、右の記事から窺われるのである。

一方、(2)では、式家(敦経・敦周・敦光・敦綱)と大江家(匡房・匡隆)の作が拾われる。

守覚の撰と伝えられる龍門文庫蔵「啓白諸句集」は、啓白文を作る参考書として多くの作文例を類聚したものであるが、計二十六名の作者中に、匡隆を除く右の五人の名が見える。そして、中でも、式家の敦経・敦周は、

○御本云「承安五年二月十三日晡時奉授」禪定大王了李部少卿敦経同談義理又「賢清闍梨侍座時也雨已止雲未晴矣」

御史中丞兼翰林学士敦周」 (小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓詁の国語史的研究」〈昭和42年・東京大学出版会〉附録・I漢籍

古点本奥書識語集、性靈集十帖 醍醐寺 (巻第六)、傍線は私に付した)

右の記載などから、性靈集の加点を通して、守覚法親王と直接交渉のあつたことが知られるのである。

以上のことから、仁和寺僧以外の、儒者にしても、小野流の僧侶にしても、当時既に故人となっていた寛信・敦光・匡房も含めて、そのほとんどが守覚法親王と何らかのかかわりを持っていたという注目すべき事実が浮び上がってくるのである。この項のはじめに、筆者は、本表白集の特色として儒者の作が僧侶の作に混って収録されていることを指摘しておいたが、本書の如き文献の成立には、山崎誠氏の説かれるように、守覚が主催した仁和寺に於ける真言宗の宿老と博士家の鴻儒達との學術の交換、即ち真俗の交流という文化的な背景が存していたものと想像されてくるのである。従来説かれてきたように、平安時代の中・後期には、専ら儒者がその任に当たっていた表白文の作成を、院政期に入ると一般の僧侶も自ら行うようになったという事実は、そのこと自体、真俗の交流を背景に想定させるものではある。しかし、本書は、その実情をより具体的に伝えてくれているものであると思うのである。

ともかく、本書は零本であって、その成立の時期や編者についても、今迄に述べてきたことや東寺旧蔵であるらしいことなどを考え合わせて、建久六年（年紀最新）以降鎌倉中期（書写時期）以前に、真言宗の僧侶（東寺・仁和寺関係か）⁽²⁷⁾によつて編纂されたものであろうということ以外は、今は未詳とせざるを得ない。しかし、ここに縷述した本書の特色と思しき諸点については、今後、表白集編纂の歴史を考える上で、又、表白文体の歴史を考える上で重要な意味を持つことになると思われるのである。

注

- (1) 第四の十三〜十九丁裏と第六の一〜十四丁裏に文書有り、中に仁和寺・興福寺関係のものを含むか（橋本初子氏の御教示による）。
- (2) 川瀬一馬『阪本龍門文庫覆製叢刊十二』（昭和49年・便利堂）。昭和六十一年七月二十四・二十五日筆者原本実見。
- (3) 新訂増補国史大系。
- (4) 奈良国立文化財研究所史料第六冊『仁和寺史料寺誌編二』（昭和42年・吉川弘文館）。
- (5) 奈良国立文化財研究所史料第三冊『仁和寺史料寺誌編一』（昭和39年・吉川弘文館）。

- (6) 注(5) 文献。
- (7) 高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来 表白集』(昭和52年・東京大学出版会)。
- (8) 築島裕注(7) 文献。
- (9) 新訂増補国史大系。
- (10) 醍醐寺文化財研究所『研究紀要』(昭和59年・法蔵館)。
- (11) 『国書逸文研究』第十六号(昭和60年12月)。
- (12) 山崎誠注(11) 文献。
- (13) 新訂増補国史大系、「奉_レ為_二二条院_一。於_レ広隆寺_一供_レ養_一一堂_一。」(仁安元年七月二十六日)。
- (14) 増補史料大成、「御室大事御之由、京中風聞、自女院有御使、申刻已令崩逝了。」(仁平三年十二月六日)。本書の本文に、「相当先師二品法親王^(高野御室)一周之御忌_一(十六才)とあり。
- (15) 新訂増補国史大系、「皇太后宮興福寺内御塔供養也。」(康治二年十二月二十日)。本書の本文に、「愛国王皇后ト吉土於興福寺立三重之塔婆」(十九才)とあり。
- (16) 辻善之助編『大乘院寺社雜事記』四卷(昭和39年・角川書店)、「美福門女院之姫宮八条女院相次命恭敬供養給而大皇太后宮權大夫俊盛・師家奉請、承安元年八月廿五日奉請之。」(文正元年閏二月四日)。
- (17) 築島裕「醍醐寺蔵本表白集について」(注(10) 文献)に、「その書写年代は鎌倉初期を下らず、(中略) 現存するこの種の書の内、最も古い写本と考へられる。」と説かれている。
- (18) 注(7) 文献。書写は、醍醐寺本よりも若干下ると説かれる(築島裕注(17) 文献)。
- (19) 「善本解題99表白集」(京都府古文書緊急調査報告「東寺観智院金剛藏聖教の概要」昭和61年3月)に、「きわめて多数の表白集を収集・部類したもので、他に類を見ないものである。もと十二帖あったと思われるが、第四を欠いている。所収表白は全てで二一八篇に及び、それらを、第一(結縁灌頂三昧耶戒・同初夜・伝法灌頂初夜) ……(中略) 第六(修法・護摩・供養法) ……(中略) の如くに部類している」(二一八頁)とあり、第一・第六の部類が本書と全く一致している点、注目される。原本調査が待たれるところであるが、もし、この東寺本が本書の異本の如きものであるならば、本書の規模は、元は相当大きなものであったことになる。

- (20) 本書第四③の「勝賢」と『御室相承記』の「勝憲」では、○印の如く、字が異なっている。しかし、『野沢血脈集』巻第二(真言宗全書三九)によれば、「本名=勝憲。配流故替=用賢字。」(第二十二勝賢)とあって、同一人物であることが知られる。
- (21) 鳥羽院第五子、大治四年閏七月二十日降誕、久安三年四月十日第四代高野御室覚法親王より灌頂を受け、仁平三年十二月同法親王薨去の後を承けて仁和寺の寺務に補せられ、嘉応元年十二月十一日、四十一歳を以て薨去(仁和寺御伝)など。
- (22) 後白河院第二子、久安六年三月四日降誕、仁安三年四月十二日第五代紫金臺寺御室覚性法親王より灌頂を受け、翌年同法親王薨去の後を承けて仁和寺の寺務に補せられ、建仁二年八月二十五日、五十三歳を以て薨去(仁和寺御伝)など。「親王は多能な御方であつて御著作も少くない。仏道に於ては覚性法親王や覚成僧正、勝賢僧正、源運僧正等について広沢小野両流の奥秘を究め、沢見鈔、沢鈔、野月鈔、野沢鈔其他多くの書を編著せられたが、声明や管絃の道にも通ぜられ之に関する御著述もあり、御筆跡も美しく殊に梵字に巧であつた。和歌を嗜まれた事も勿論であつて、毎月風雅の士を召して歌会を催され(左記の序)、御作の撰集に入つた者も少からず、北院御室御集と題する家集も今に残つて居る。」(橋本進吉「法橋頭昭の著書と守覚法親王」・『史学雑誌』第三十一編第三号、大正9年3月)
- (23) 後白河院第八子、仁安元年十一月十三日降誕、元暦元年十一月五日第六代喜多院御室守覚法親王より灌頂を受け、建久九年八月五日に仁和寺の寺務に補せられる(仁和寺御伝)など。
- (24) 「真俗交談記考——仁和寺文苑の一考察——」(『国語と国文学』第五十八巻一号、昭和56年1月)。
- (25) 山岸徳平「澄憲とその作品——文集を中心として——」(山岸徳平著作集I『日本漢文学研究』所収、昭和46年・有精堂)。築島裕注(7)文獻。
- (26) 橋本初子氏より、私信にて「本書を含む京都女子大学の聖教群(二十七点)には、いずれもその奥書等に東寺々僧によつて書写伝領がなされた旨記されたものばかりであり、東寺以外の所に伝来したとは考えられません。」との御教示を賜わつた。
- (27) ここで述べた、所収表白の作者の多くが仁和寺僧であり、例外となる儒者や小野方の僧も、守覚法親王と何らかの交渉を持つていたという事実を踏まえての推論である。当時の、菩提院行遍の活躍や東寺供僧の多くが仁和寺僧であつたこと(網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』昭和53年・東京大学出版会)などを考えると、仁和寺僧の編した書物が東寺に伝わつていても自然なことではないと思われる。

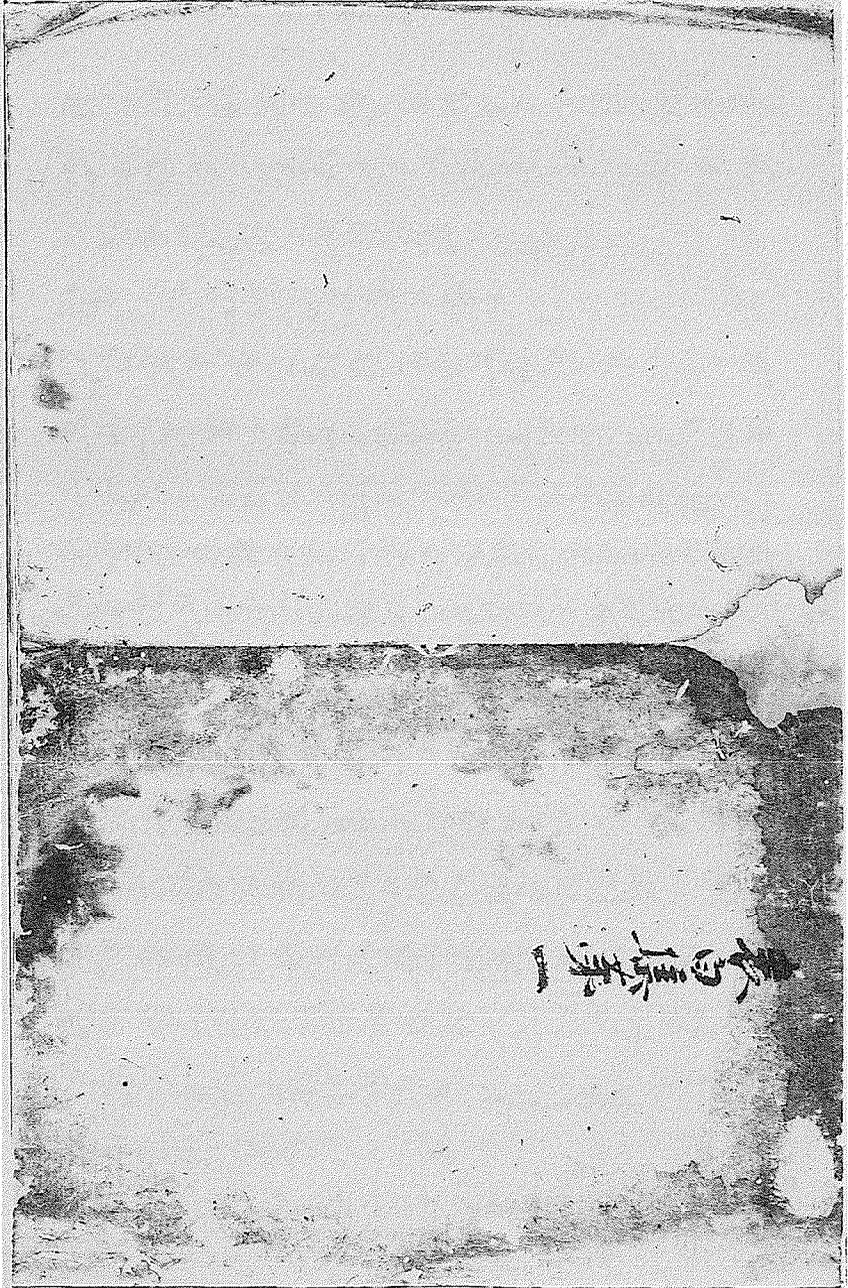
〔付記〕

本稿は、昭和六十一年度広島大学国語国文学会秋季研究集會に於いて、口頭発表したものを基に纏めたものである。席上、終始御指導載いた小林芳規先生をはじめ、神鳥武彦先生、山崎桂子・原卓志の両氏より貴重な御教示を賜わった。又、書誌等については、橋本初子氏より多くのことをお教え載いた。記して深謝申し上げる次第である。



K 186
3
199
1





京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

二才 (フ墨ナシ)

表曰集第一條條讀頂三昧戒 日初在

結條讀頂三昧戒

東寺讀頂三昧戒表白寬信法華作



支借條讀頂行法者雖解難入之妙門擇其機名而

秘教尊取上之重濁起十地而尤高故值過罪一世

二亡之條讀因是百劫之勤亦如也過過者利益也則消

衆罪之露僅因者即極廣覺普淨戒之珠是以集成

場之辭願者皆是究竟之損攝入聖壇之衆者

殊勝之善人也莫先皇始會返三百之星霜大

對直薰灰信字檀類依云親成年之作百年

改化等閉道感未誇三壽之俗隆抑金對果止不尊此

之破質言豎行寺之床率宿禁首才頻後擲

敷且世惡童扣且注措條漢京今乞戒村關象

邪智是妙子三請難上吻又滿亂言如流公道

明哲所九卷說先達所傳

觀音院讀頂三昧戒表白改淨書所作

支津卷言之重性來之也帝覆皆畫城月來

而氣不煩細尋梵聖有於浪日金對三殿凌差霜

之石與訪舊先從皇朝公法行傳均臺之中自谷
 以匯私子白平之一車者未過軌輒終三臺之進計
 涌青龍之五執者深湛波浪拍雙園之海挾英靈數
 身將而攝者欽推結緣崖頂者覽玉生微之化每
 衆宜樹悟之方便也思以自樂之難臨舞技入聖之
 時式許式校彼太字敬聖之志粟秘中於大亦空廣
 富矣仁明淳化之甚初密儂於教王護國寺之知層
 同堂重殊感者推崇孔也美富知監大會之為
 當之監觸者寬弘之奇驟翰選而有幾迴具滿者
 悔區之春感俯降而展息舊辰類行以露也此人焉之強
 佛種昭文鏡良材高材後集群書之講解觀音度
 符戒毀戒廣秀信條之普門寔非三洲五劫之流弊
 願止求个化之良緣雜語之百五障雜竹重衣繫木
 如之珠誰留之障字要密盡訂廢前運息之難離釋羅
 衲二十口出格洞而送請之樂銀黃二人之移林路如恒
 率一環抵玉之響唐鐘相和柝檀香之自濟集家傳法
 會之師望望其不生乎方今之歲物皆主早屠千載
 單專博三統之隆閣德王之靈雅寄來文王頻

孫裁當今聖白（初齡）是上皇（幼子也）古奈
 例協佳賦或並則禁闈無為隸洪實於震陸射山有樂
 伴仙弄於松石南而寺稱（地）地過佛自（弄）手
 編（心）歸更誇春風（遊）射於雲射佛子頌（願）
 下皇（性）寺（所）雖未盡（上）有噴哲（跡）畫（機）
 始（先）茲時幸得（為）軍唱（淨）作（願）理（前）法
 以汝及證明伏（中）會聖眾（之）音哀（終）教（白）

詞卷白

（同）作

方今聖皇陛下（斷）難（而）釋（天）五帝（之）說（區）詞

在（機）機（而）毫（毫）海（三）皇（名）朕（終）末（從）聖（華）之聖
 展（自）致（半）羊（勿）踐（畫）乳（坤）醜（混）就（目）暗（成）靡
 風（有）集（祥）神（之）征（未）亦（世）齊（方）惟（子）自
 昌（運）而隆保（推）與（右）八（挽）關（以）者（臨）若（漸）着（雨）
 威（貫）秋（霜）種（手）葉（而）樞（鴻）塞（雅）集（化）於（北）辰（之）邊
 酌（檻）狀（而）助（龍）面（備）言（法）於（東）漸（之）流（事）我（因）帝
 戰（帝）千（過）佈（法）佳（辰）故（據）係（備）大（實）者
 道（皇）高（德）道（場）便是（天）寶（圖）之劃物（春）香（烟）
 豈（徒）席（寧）非（東）奇（富）陵（之）蕭（儀）如（未）有（符）泛（此）

而起高祖一次一父職如身燬傳登畏區步
 佳聖波踏霞靴鴻靴一亞齊步歸秦律步
 自公密畫畫而步出不知其高轉波正一畫
 匪石撥而行地不知其須過一波石三千里數歲
 之符雜測夢寐一廟之孔雜並九五至
 思研會集於香門一外臨九億人皆集杖
 戒珠於因海一晚浪盡之同七連恰木而香罪
 乘夜遠行一旁致蘭同而有渡音斯燈若三
 大信然立地言明一而有看靈雷而望者百之流
 照萬竿二昧一秋天飛清波陳玉難聖法運信
 於一宗一願歎朋明雖尊纒區蓋復於百濟
 月我若機緣轉東一引摩佛子一行移
 而長一威儀簡重一之難不隨喜坐則瑞壽
 金心一喜動天一德暖矣子長紫雲高時輝
 洞見地一氣白地子又嬉油絲水拾餅冰雪
 一剪華城霞野在近野而落一一真

同表 竹葉作

夫結緣灌頂一其善天卦法以薄伽一善

吾巧也隨行無用觀門神力行振妙
 鬼也任性欲而沉座嚴標許廣及行擇
 頓撥捨漸發解滄通直即流絕佛
 地靈斯隨類應物音便無之教音樂之秋
 術者欲是以巨品天寶唐達客壺而依唐
 崇不朝弘仁奉排范閣而繼曠端自從法
 式之規量漸負於高院之降寒燠概
 紫回秦陷吳平清州既舊驛源還子
 二代皇家尊崇數珠忽斬侯為臣河系

未豈伏推金上下推毛之數御覽之體之六之
 在如於而棄神態同軒奉御齊指奉賢朝如德
 葉悴且禪周仁禁竹露暖盡風刺留晴劍
 寒卓烟閑連素連詢既方今冬暮月
 中句空離者相應設秘密大會
 法皇盤出玉之觀仙澤外車始和庭又之念仙
 院共位儀畢侍敬私發露膽成同將讀誦
 勤看歎響音徒者有廣六之群片移龍
 此於象網外運者舍衛九儀庶類文木

於蓬宮之序之博善故奉賢聖上金輪儼威
 歸州而遂轉琉璃橋連之五岳而不搖如之湯
 禪觀之水之清波相如雖兼城遂之如金柱
 石經華院宮所者流遊之精皇親家全落
 屏一因履辰神宴勃動如鐘斷之鎔十官晉
 察紛真特於松筠之節室請手較有量獲
 端銅骨得聲星檢言寶宴之寂玄界心度武備來
 戰馬放花山之風徑治氣調樂崇陰之俗化破
 蒸之衆主離有之迷儉教內

同表 用非

志式觀浩綠灌頂之元輝 灑脫入聖之佳品
 尊蓮生於香門手輪圓具足之寶相 敬為祥眼去
 清泉通金野豎眼之明 鑒馬內證攝蒼之豈非
 知盤備不指敢許者為圓汗之廣緣也 上宗信解
 焚樂不釋生指不輪柳漸慈內化之有便也 月
 前照誰家瀟勝因丹車所聚 美鄉宮景 蘇侯
 之帝陛下 鈞當 天統小守神 為政 道論 與協佳
 飲蓮歌 西顧之聲 滿園 連津 浴身 被珠 俗踰跡

懋博之貞連（後醍醐天皇）醒（醒）宰（宰）之葵輔（葵輔）所（所）言（言）非（非）實（實）直（直）德（德）
 趣（趣）春（春）之（之）卦（卦）勝（勝）也（也）豈（豈）果（果）忘（忘）其（其）心（心）憂（憂）處（處）冬（冬）為（為）律（律）昔（昔）
 昭（昭）室（室）則（則）抽（抽）展（展）歎（歎）之（之）疑（疑）襟（襟）於（於）質（質）重（重）之（之）異（異）業（業）上（上）東（東）
 諸（諸）天（天）善（善）照（照）臨（臨）玉（玉）階（階）並（並）光（光）

圖（圖）母（母）仙（仙）院（院）東（東）隨（隨）香（香）燭（燭）華（華）車（車）轉（轉）小（小）鏡（鏡）履（履）何（何）帶（帶）
 衣（衣）衣（衣）信（信）儀（儀）粉（粉）澤（澤）之（之）趣（趣）圓（圓）行（行）龍（龍）鏡（鏡）寓（寓）以（以）貨（貨）管（管）
 衆（衆）出（出）緬（緬）阿（阿）之（之）序（序）夏（夏）臆（臆）行（行）龍（龍）鏡（鏡）寓（寓）以（以）貨（貨）管（管）
 鳳（鳳）城（城）西（西）殿（殿）空（空）徒（徒）鐘（鐘）風（風）水（水）亦（亦）意（意）烟（烟）之（之）裏（裏）已（已）并（并）

今令

首（首）梁（梁）市（市）西（西）湘（湘）宮（宮）之（之）明（明）尊（尊）集（集）為（為）義（義）氣（氣）道（道）之（之）者（者）八（八）益（益）餘（餘）
 聖（聖）之（之）饒（饒）林（林）因（因）乎（乎）設（設）曆（曆）送（送）濟（濟）意（意）難（難）行（行）之（之）者（者）幾（幾）十（十）
 許（許）車（車）波（波）頭（頭）此（此）密（密）格（格）清（清）乳（乳）沃（沃）你（你）願（願）龍（龍）而（而）保（保）你（你）淨（淨）
 却（却）之（之）風（風）區（區）朝（朝）鳳（鳳）巢（巢）歎（歎）祥（祥）禁（禁）橋（橋）之（之）陰（陰）鎮（鎮）靜（靜）始（始）身（身）驅（驅）
 尉（尉）凍（凍）隨（隨）為（為）郭（郭）老（老）之（之）味（味）充（充）門（門）樂（樂）就（就）書（書）翼（翼）獻（獻）殿（殿）長（長）生（生）
 於（於）天（天）拔（拔）帝（帝）榮（榮）之（之）園（園）久（久）芳（芳）德（德）錄（錄）補（補）哀（哀）之（之）商（商）推（推）禮（禮）
 亦（亦）睽（睽）之（之）十（十）州（州）樂（樂）鳴（鳴）挂（挂）鳥（鳥）高（高）枕（枕）紫（紫）葉（葉）塞（塞）之（之）三（三）十（十）里（里）

八才（ウラ墨ナク）

解鷹トウ或トウ与トウ乘トウ于トウ早トウ游トウ之トウ是トウ不至トウ于トウ豊トウ稔トウ之トウ蓄トウ之トウ窮トウ利トウ也トウ

恩備トウ泰トウ應トウ 初トウ要トウ振トウ借トウ巾トウ乾トウ臨トウ佛トウ臨トウ法トウ亦トウ先トウ跡トウ刻トウ

尾トウ易トウ生トウ願トウ化トウ林トウ以トウ滴トウ原トウ願トウ孫トウ疾トウ遷トウ滑トウ情トウ之トウ氣トウ斷トウ事トウ

得具述教白

同表白 敬後様作

夫トウ密トウ教トウ之トウ法トウ相トウ歸トウ聖トウ方トウ對トウ聖トウ頭トウ說トウ法トウ之トウ首トウ秘トウ宣トウ言トウ

末トウ宣トウ龍トウ極トウ坐トウ甚トウ時トウ啓トウ鑄トウ塔トウ而トウ始トウ弘トウ自トウ公トウ采トウ高トウ相トウ

養トウ傳トウ殊トウ異トウ於トウ西トウ天トウ之トウ意トウ者トウ之トウ純トウ滬トウ留トウ而トウ終トウ未トウ東トウ漸トウ之トウ

水トウ音トウ機トウ後トウ者トウ不トウ殊トウ許トウ煩トウ證トウ保トウ位トウ空トウ盡トウ之トウ欲トウ非トウ嗜トウ

善トウ者トウ不トウ姑トウ知トウ自トウ覺トウ所トウ有トウ境トウ也トウ之トウ故トウ聖トウ談トウ持トウ淨トウ之トウ

方便トウ入トウ心トウ軍トウ於トウ空トウ場トウ下トウ煩トウ幽トウ深トウ之トウ善トウ運トウ博トウ學トウ類トウ也トウ

福トウ田トウ之トウ中トウ留トウ未トウ男トウ女トウ之トウ運トウ步トウ也トウ先トウ需トウ雨トウ而トウ需トウ雨トウ而トウ需トウ雨トウ來トウ使トウ

舊トウ甲トウ之トウ後トウ曠トウ也トウ非トウ鄙トウ聖トウ之トウ言トウ集トウ者トウ水トウ滬トウ自トウ結トウ使トウ感トウ

慶トウ承トウ消トウ戒トウ香トウ意トウ心トウ成トウ仙トウ境トウ榮トウ鬼トウ教トウ誠トウ是トウ利トウ益トウ

衆トウ生トウ之トウ大トウ會トウ鎮トウ護トウ國トウ家トウ之トウ功トウ能トウ也トウ抑トウ全トウ附トウ伊トウ子トウ三トウ

空トウ之トウ法トウ水トウ推トウ深トウ寧トウ決トウ音トウ莫トウ之トウ疑トウ雨トウ部トウ之トウ照トウ殊トウ難トウ

蓋トウ法トウ指トウ周トウ龍トウ之トウ聖トウ環トウ不トウ充トウ下トウ之トウ愚トウ質トウ難トウ厚トウ許トウ子トウ之トウ

萬トウ聖トウ作トウ願トウ理トウ有トウ法トウ身トウ海トウ會トウ醫トウ衆トウ早トウ喬トウ聖トウ坐トウ地トウ

果啓教目

專勝幸直表曰 皇倉卿作

夫推教實教之義也羅也藉也於秘傳教之月二
 意也風氣也直也有也大自在也成也直也此儀大實也
 玉至也實也之其也陸也也也普陸也海也會也十也方也圍也繞也言也上也尊也
 一時授職也相好也之無也邊也則也眼也障也盡也陸也陸也之風月
 論善根也之也無限也之也用也通也法也聖也之也煙也龍也卅一位
 大士承也波也榮也三也个也之也石也如也小也業也行也瓊也真也意也
 一高誠也是也真也實也取也深也言語也已也教也孝也之也故也教也
 亂也要也敬也誠也養也之也暮也月也之也清也陸也於也清也嚴也修也德也
 灌也頂也二也品也法也翻也王也為也人也門也四也聖也耶也一也情也徑也午也非也
也力也讚也衆也之也公也摩也患也送也骨也轉也福也計也皆也此也桃也
 密也室也之也車也燈也仍也今也却也便也為也可也日也長也死也牙也室也不也
 敬也改也賜也天也人也之也香也盡也石也谷也已也水也力也塵也令也此也行也傳也
 右也不朽也吉也是也通也華也千也億也行也鸞也旗也頂也卽也八也十也車也
 于也古也斯也難也致也一也日也黃也梅也檀也種也子也蓮也之也豈也非也二也五也
 之也真也千也願也之也此也刀也德也先也發也神也誠也高也考也說也指也據也
 賊也乞也恭也讓也惟也靡也受也法也未也則也果也處也先也帝也就也

十才 (ウラ墨ナシ)

日首、若此堪息、境靜真如、宮禪定淨呈顯、
結山、月桂入懸、兩浮晴呈木居、老門、落蓮

早用西五

金輪之第三、他於茶天所收發百迴、所

棄、介佛宜添長秋、如竹南境、觀水湯、后

大橋、獻筆、策出上、林松栢常茂、推州、推皇

之、地務露、音俊七道、玄音月、西順時、銅鑪、概

聲、普天、辛壬、丹素于區、唯重譯、乃呈、于

亂、平、音、無盡、海、元、盡、象、音、後、訂、軍、音、傳

時眺矣

結緣、頂、初、夜

東寺、准、頂、初、夜、表、白

寬信、律師、作

文、累、年、受、戒、行、三、業、淨、流、障、舍、排、林、密、門

下、歡、入、道、頂、壇、場、依、懶、奉、望、之、卷、跌、踏

物、行、法、唱、羅、錢、誦、讚、歌、音、伴、陀、羅、東、音

備、依、舊、僧、者、入、礼、署、地、十、五、舍、列、呈、圓、計、律、行

八、圖、取、只、並、月、梭、花、去、傳、佛、叮、結、者、在、音、高、

刹蓋灑水受明所注者皆一世之塵垢異也
具博之心上開八葉之蓮元父母所望之月得備
三朝之善根倍獲三衆而善寶深信願海會
諸尊殊照二頂之信場各成一古之善願

觀高院灌頂物夜表坊衛軍所作

丈結緣灌頂之行者直出通場之軌元也流篇
者不知能忘之者區望極則自利增爐十如十
去之極堅則利他輒行乎苦善女之體同引
細素如澗智水生身即達涅槃又集寶珠和

密壇人官即自紅宮之足觀梵完之白苑披

而誠有德之佛信諸踏八音之一葉器在斯言

如之元根音妙莊嚴之訓佛舍音尊依佛階

眼之致也今德儀衆之文字與夫區起龍猛

龍智之私區彼者應化之權說之迦羅樹日

亂胡偏遠此者法并之膏浩也且如策之覺

信誓無情懷付三之儀又抑斯軌之聖名國為

儀佛切人為高殿者欲生則蘭威月靜百邦作

其之松門燈等三毛健其榮矣

同表白訂書作

蓋因真匠造漢化機奇，到菴嚴園，燒香
 剛過清符奇，測柱圓海，波若離大蓮花
 心，雁用字迴對，古公駁，奇謀同，柱石當
 院每牙，恒規依，估係，權頂，腐舍，細畫，同
 朱先，汝蘭，闕，司，黨，刑，香，感，障，露，滅，後，華
 皇，用，開，覺，蓋，首，探，乳，取，雲，者，三，千，八，字，學
 至，德，要，道，一，大，綱，今，入，滿，年，禮，者，汝，身，計
 唯，蒙，內，陰，走，地，一，賺，利，真，俗，相，失，一，概，豈，同，稱
 金，橋，取，一，幼，冲，一，擊，寶，曆，報，格，一，在，旋，機，歌
 二，歌，掩，和，藏，首，於，有，虞，一，王，高，監，監，今，得，良，劍
 於，片，唐，一，鏡，兩，落，院，具，皇，澤，暖，一，具，如，春，柳，飛
 喻，前，冰，附，盛，考，一，虛，月，行，夫，帝，欲，不，歡，竹，著
 千，行，亂，象，部，瑞，香，伏，請，一，六，高，祖，隨，及，證
 明，此，素，分，被，盡，則，龍，為，煙，大，群，方，作，元，首，一
 尊，鴻，素，維，長，智，道，從，詳，翠，一，詠，夏，頂
 法，皇，之，性，復，區，測，同，甚，鎮，視
 心，院，一，移，錦，帳，觀，一，之，宮，推，高，象，海，清

正午和櫻歌目
同表日月所作

原走曰種恩德唯分國日慈惠和家五大權
碩雅異衆生度脫功此天此覆載仁
足黨如輪如環流轉一善欲斯是上祈能
九五至尊義寶錄之善信中真鴻集之奇
一庶類授下而一有訛治後灌頂一奉業

國之皇帝在少察而踐天位日月伴明暢大
此而燮氣家雲雨播澤區川易濟澤成舟於
海波連塵音假縱周馬之西岳卓非宮圓環
在謀無美專啼真一主乃懸輪伽輪救儀
則廣勸與發頓悟之善目所灑者五瓶之水
圓之流塵灯枕者曰蓋燈歷之皇移
較音高代字一排肉厚千官百密臨公我
國家傳空規切艾毒者早引破欲之此
致也情海會之節專處就
天子之御頤孔榮位穩從巖厚當終一節

歐力需學故以舉數瑞淳化

法皇之下始舉角毒不塞

國外之使仙駕陰教是調也属辰寧人誇凱

樂敬

傳法履履初夜

新室清履履表日敬言所作

原夫竹書提必實知自心美秋教雖雅在律有信通

金鼎之法忠高名言他而携平潤骨秦之自在殿

埋行高名心也適自非造力持尊持之門既挂欲

直例法者誰敬其身語意之律筆誰之作事

見之也相身言通力之非力乎得而稱者也意傳

法灌頂者通照傳也受法樂之要路備律之高依

心也音讀行着開職信之頓門也來之大秘密也昂

身律業務速矣大法塔之摩觀生合密雲也

天鼓雷之響悟慧大仙位均法王之一智無難之

月輪眩雨徑雨智展燦之秋忠會集之天蓋離

一夜楊窣窣園之雜曲徒自教善門有疾三

生六十之勞直妙性因海有得三十七智

續瀉散於天壤（流）

宮清灌頂物表（白）

需以巖崑（岳）從焉鑄鑿（覺）者高稀湖（沙）

池從變塵融法水（者）惟亦信與（生）歷知難

開佛散（鳥）自餅（骨）持身（須）信（信）值（過）良藥者

徒彼音信（五）東行（也）願（流）源（而）涉（雷）雲（道）

覽三藏（西）赴（法）破（積）而入（五）蓋（是）勸（檢）

善者圓求法（謀）應（化）巨（播）權（說）說（亦）容

願（究）竟（小）義（實）訣（豈）豈（辨）則（童）支（傳）法（誰）

履（日）捨（聖）行（之）圖（簡）建（狹）非（道）直（踏）世（現）法

悟（自）性（中）在（北）之（真）埋（壇）沙（果）德（輪）圓（即）正（顯）

毗（羅）法（界）曼（荼）帝（綯）靈（聚）輻（湊）眩（心）眩（鏡）

初（則）慧（眼）報（答）在（莊）嚴（三）觀（以）法（密）密（句）祇（長）祇

致（悟）音（聲）滿（圓）遯（去）妙（用）事（得）宣（盡）新

阿（闍）黎（弥）陀（之）皇（子）鍾（十）音（餘）慶（來）方（苦）音

將（坐）初（玉）葉（種）不（為）貴（豈）樞（機）唐（之）運（本）歎

劇（狀）音（榮）就（者）不（晚）俗（累）列（發）音（之）林（華）感（運）

後（亦）持（誰）驚（行）鑽（所）高（伏）大（積）塔（塔）塔（塔）

性廣索子化然頌言志越倫了解應乎冲
 明博達之智因物難不謂釋之龍兮誰不謂
 也苑之琳瑯兮今壽皇之威靈兮天擇相應
 一曜宿麥雨歸之即蘭本有之鏡葉忽開也
 天樹玉盤兮極傾地木根之擊汁實應臨滿
 月之億箭大射世尊之佛通有雅和塔也
 表聖念為皇子之照聖場於白馬而香煙相步
 料講一宗之善亦隨壽念復有三因之高
 御衛誰回時也則侍壽域於亦他之髮鏡髮
 西必至靈靈藥加真於居廣之代晉傳馬
 天鑄塔之實塵初驗存數備痛少之感業於
 在反卑能充期作愚儒逐素魄為至行維
 歡門案之繼臨而來脛而願九才猶迎慈謙之
 反倚唯指原顏不能所敬教白
 二律律師守法灌頂初覆美白故請宣律也
 夫天知灌頂之法其義在矣然未自證
 善托毗面維法表檀子早者徒觀魚大
 輪轉之智不阿羅漢行之花其至密密唯德高

十八才(ウヲ墨ナシ)

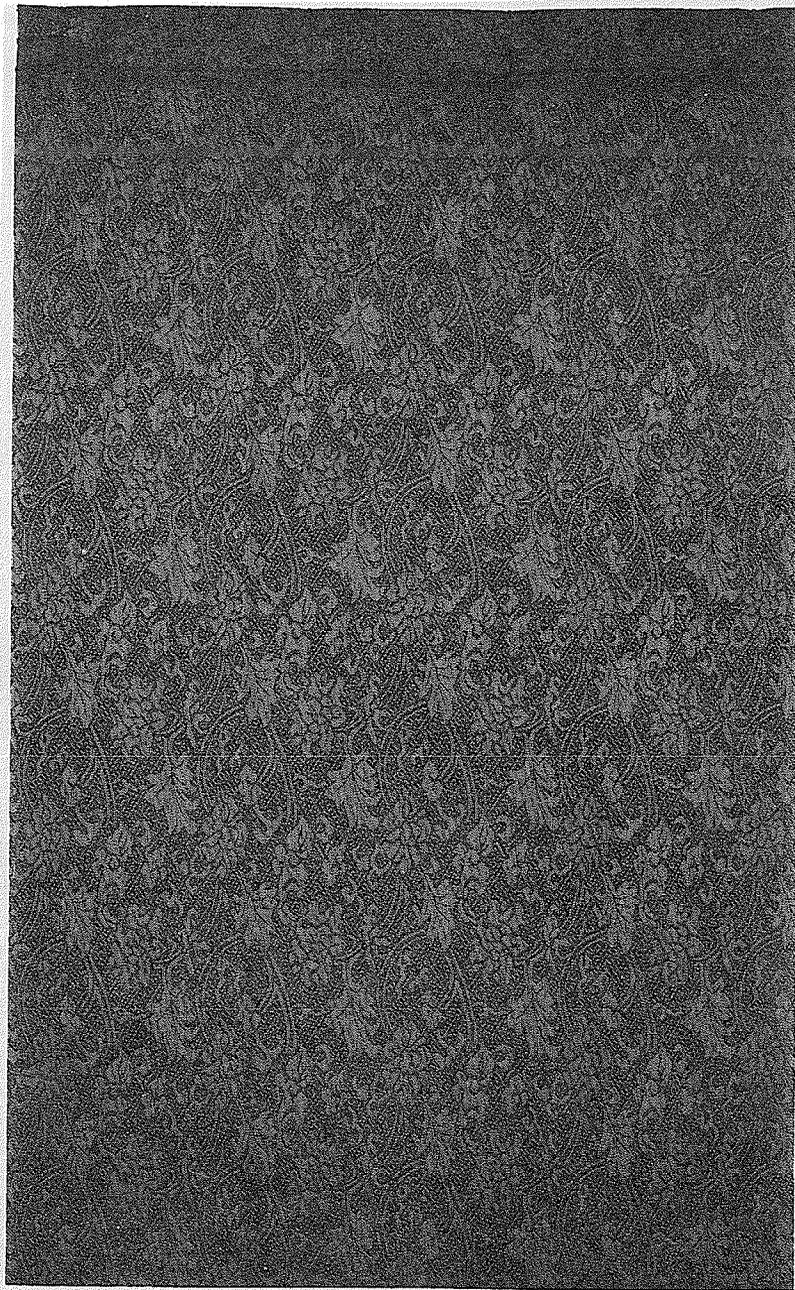
心密師謂為_一紫雲窟_二入壺者是佛家_一
 窟也漸機年_一以_二第八葉_一應曠_一是_二我道_一
 聖德太子_一以_二第五祀_一本被_三金剛三藏_一隨龍
 智也_一數_二給_三住_四林_五七_六奉_一風_一與_二法_三天_一見_二真_三果_一也
 言_一圖_二案_三來_四按_五方_六里_一浪_一值_二過_三者_四故_五家_六不_七容_八勿_九付_一法
 者_一今_二有_三以_四却_五美_六信_七心_八受_九者_一誓_二心_三娑_四婆_五者_六誓_一說_二矣_一
 十_一轉_二用_三明_四窟_五深_六整_七惠_八朗_九之_一立_二淨_三言_四三_五千_六未_七句_八甫_一
 就_一卷_二其_三空_四量_五一_六深_七則_八協_九佛_一說_二其_三空_四量_五乎_一
 亦_一未_二行_三後_四已_五謝_六而_七已_八誠_九彼_一前_二行_三以_四上_五江_六之_七無_一
 以_一中_二仁_三乎_四權_五既_六而_七次_八祖_九行_一忠_二忠_三往_四日_五言_六度_七傳_一
 四_一智_二法_三至_四者_五匠_六今_七箭_八之_九新_一得_二探_三聚_四近_五信_六統_七流_一
 俱_一接_二法_三侶_四中_五惠_六之_七暗_八以_九難_一時_二戒_三味_四未_五滅_六猶_七清_一
 殊_一傳_二誰_三識_四有_五鏡_六長_七居_八相_九耐_一奇_二妙_三法_四解_五流_六乎_一
 第_一深_二入_三乎_四句_五句_六遺_七韻_八禪_九樹_一梧_二枯_三不_四過_五傳_六透_一
 以_一戒_二竹_三為_四莊_五介_六傲_七空_八血_九脈_一嚴_二不_三得_四許_五煙_六時_一
 竹_一為_二恨_三介_四得_五作_六巾_七乾_八時_九豈_一瘠_二以_三悔_四難_五衆_六然_一
 覽_一舍_二年_三以_四鼻_五隆_六隆_七加_八被_九信_一願_二各_三者_四諸_五畢_六然_一
 元_一八_二祖_三呼_四早_五養_六際_七等_八白_九必_一字_二偏_三招_四義_五矣_一

十九才 (ヲ墨ナシ)

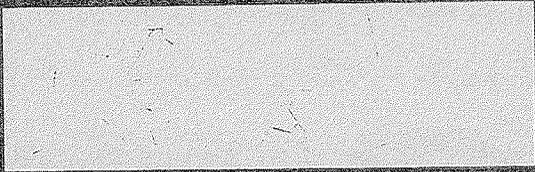
竟傳清淨初夜（白雲傳教）
 免秘密清淨之行法者言竟甚深（無執念）
 浴首水者二氣之露易得皆保覺化者（業）
 之蓮即開羅入難登高於十二磔雲區極區知
 深於八河濱海邊使月氏者龍控弄八鐵塔（）
 傳念自域者弘法大行廣養義誨（賜教訓然）
 自與化密受密字之稱于品方品品量雖小務
 凌升弘（）長通馬繞受賜藏（）弊下留南惟
 士（）懷真矣以傳念則（）惟願亦今受者信固多
 筆素之賢（）之冥應念志抽誠欲受雨（）乎
 可早無深遠（）大適更滿瓊（）高（）悲（）北（）少（）隨
 戒珠不磨法燈（）已瞻黎授前賢（）之慈跪踏香凍
 撰加後業（）之作（）危（）雲（）荷（）雀（）徒（）欲（）純（）佛（）許（）實（）誌



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印



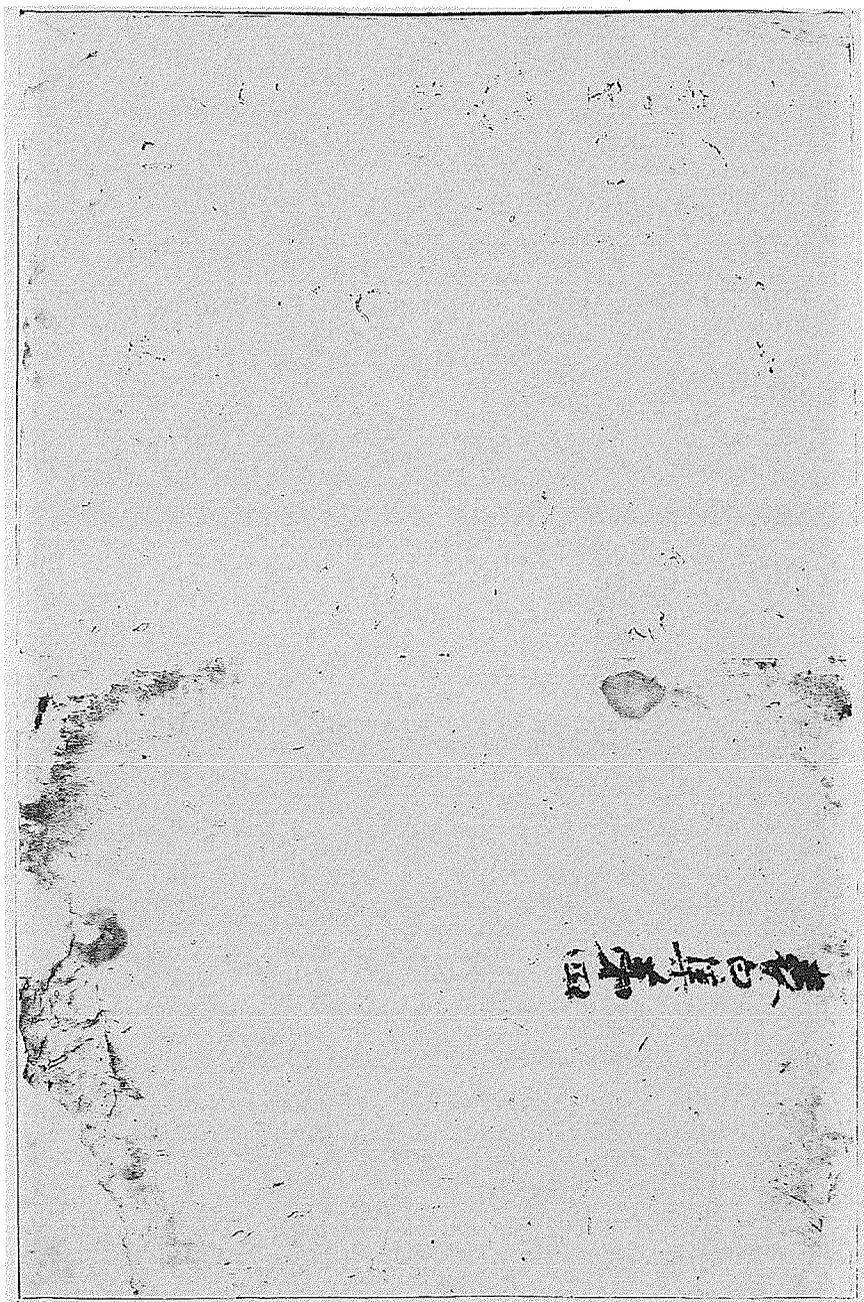
京都女子大学蔵表白集解説並びに影印



K 196
3
109
2



二四七



走賢塔高妙之基，梅詠身之跡，密感沫
 秋之教，建生律呂之因，誠知文提者，如張不可
 宜真言者，識者可學，而穴作於上，院
 戒香內，土室，於十香，於歷劫之際，燃輝外，雖
 積萬劫，如燄燄之初，冬天，燄世之軍，雅奪
 早始，故山而，遊信清涼，宜溫之，岳，水，頌
 蓋如，野如，音，張，無何有之境，惟，思，甚，壯
 於，塵，水，之，見，空，假，中，之，觀，在，於，陰，素，真，於
 水，座，之，月，燄，誠，中，念，之，輪，常，行，跡，兼，道
 志，於，心，之，路，非，後，精，勤，外，者，空，建，善，家，建
 練，記，音，手，且，只，插，近，之，地，物，其，變，如，字，重，空，境
 刺，起，五，層，之，浮，面，今，亦，較，疑，之，弓，像，行，認，天
 日，如，未，可，因，因，生，未，亦，成，就，與，量，伸，也，甚，盛
 金，龍，室，高，同，載，之，卷，勝，之，勢，三，觀，欄，娟，寄，境
 應，焉，治，者，之，如，竹，葉，實，之，梁，盤，為，成，諸，身，有，眷

表白集卷之二
 塔供養卷之二
 附塔供養卷之二
 醫權作



之皆禪方便之天不說憐愍之有也二美廻
 臨幸之彈仙官聲之化之歸得相靈集暫
 移龍尾之行美保月來法席尚之盛况舉
 懸張齊越牙造經越致糾若也西唐青龍
 之沈妙旨佛調暗迷子君自聽之韻氣莫不用
 翰先效多善報奉祈如院於陽水已異甚汀
 有清之期始於靈犀伴少室三峰之巖如六帝
 因說靈爽之仁重曆久空圍玉姪奴之德崇界
 鎮長院富去清屏香保非招之捨辟去原中
 高時留筆行之詩象海有清地廣搜子只願今此
 塔波傳丁石如舟機粉壁之亦元疾養也連照律刊
 近掩入中金鑿寶鈴之合音自上派有頂下繼
 無同含鐵其仰首之者忽發烟地之愴非情觸
 甚致之者咸願喜提之禮子迴向斯利靈慈效自
 潘諸卷表曰說王平作者打等
 又以歷然而難忘者慈文聽月之德也送也
 而難忘者慈文聽月之德也送也
 而難忘者慈文聽月之德也送也
 敬且差也溫宗之定三行事孝為年美大

號之。都行中早朝。入觀。自愛。不堪。多。年。之
 惡。意。愈。音。因。敢。見。謝。德。之。正。不。如。塔。破。疎。遠。始。善。
 果。高。帝。城。之。凶。難。達。中。寶。之。浮。圖。鳳。皇。冠。之
 揮。時。天。眼。迷。迷。地。涌。出。之。舊。冠。金。銀。寶。鈴。之。櫃
 吹。鼠。耳。後。虛。度。大。之。之。割。依。彼。彼。所。圍。之。敵
 巧。德。無。量。兒。兒。花。丹。膽。子。檀。香。千。卷。崇。崇。集。集
 之。割。殺。勝。利。不。測。兒。兒。若。若。金。玉。男。於。節。中。但。伴。考
 大。施。去。乞。奔。于。生。之。日。殊。成。孤。願。而。怪。歸。也。來。畢
 歸。木。之。如。忽。赴。泉。壤。之。跳。余。弟。妹。大。泣。哭。其。屬。號
 歸。三。刻。河。諸。如。雲。之。播。以。如。生。如。死。如。實。如。虛。如
 可。老。頂。年。留。爾。游。之。故。卿。在。臨。遺。風。樹。之。恨。今。日
 送。西。方。之。浮。刹。竹。黃。月。輪。之。相。二。子。之。怒。念。如。此
 諸。佛。之。如。見。高。龍。走。高。屋。奪。時。并。才。之。深。激
 難。津。考。行。之。道。半。邊。禮。盡。皆。以。官。見。之。愛。及
 脚。述。塔。味。之。地。勢。云。已

佛。堂。四。寸。基。泥。香。燭。表。白
晴。信。拜 晴。信。拜

南。瞻。然。門。天。自。年。國。祚。定。之。王。茲。一。心。清。淨。之。悲。願
 身。三。乘。相。應。之。法。念。身。六。善。集。之。今。之。秋。德

標為天鐵塔（道安於小兒之首斷髮形也）

十年之并兒大（今）鎮盡徒七百餘

跡尔頓（寶）願海志（知）聲明（而）今（年）時相富

上陽中春良辰美景即其祥感相應悉然哉

蛇之時節（之）介則中陽（月）前（天）人笑會陸雲

之美（品）亦（至）同（釋）杖（之）烟（濁）竹（之）首（如）之散

毛飛（風）如（雲）花（積）吉（如）之（室）少（香）室（風）似

入（與）香（碎）茶（之）境（清）之（六）味（勝）巾（須）衣（成）者

欲（為）今（者）唯（之）丈（之）錄（兼）同（靜）花（傳）卷（之）

句（鶴）洲（波）平（月）對（千）秋（之）笑（自）起（陌）芳（香）露（盡）豈

畫卷

身羽登金對院倦養兼（日）中（年）作

文（法）仲（日）現（瑞）先（如）天（之）鏡（清）水（湛）沉（澗）潤

東（夏）之（國）自（合）呼（降）下（皇）後（小）年（安）展（皇）不（歸）

依（佛）陀（迷）道（場）各（太）上（法）皇（仁）風（蓬）雁（天）

望（澤）昔（緝）四（海）早（進）寶（低）忽（慕）衰（晚）展（歷）集（少）

棄（之）猛（難）責（循）探（五）智（之）併（兼）全（論）德（維）

嚴編翰鐵塔之流輪也專創始於臨之河原基
 跡音牙給隆密教之秘塔春秋久迴自茲漸顯
 達祇園之舊觀始山之塔卜高量傳漢明自鳥
 之膝錫浴水之砌連精舍出水泉石之湧涑充
 如何轉建池之風流屹守高量之壯觀也遂靈
 華嚴寺之寺之壯嚴空是殿宴樂淨刹之行一
 正統之中自殊施利極之數十有合誠之素範也
 加之六八之慈航珠道推於基堂之建基也
 妙嚴佛儲流矣濁世之野蕪矣是以佛則女
 藝之紀垂錄盡金頭文六經是妙法之真至靈信
 近寫數軸便探暮春之良辰開遠眼於野苑弘
 之審宇新雅瑜伽之壇場多儀律集於現土傾入
 之妙造三十四之浮屠甚寫此塵千言亦之聖聖區
 驚無親近思掃之圭陸六申忠乎周忠遠外
 然之天本同胞皆至善法若欲則加蓋之特恩
 金鑲惠光於三朝大王之正躬遂持寶策北
 百歲矣

皇初尖障夫空標藝表自迄昔者
 作

七才(ウヲ墨ナシ)

依前始吉宣散之騰葉采為日識之禮若剛至
 美勤行之妙自筆適月先之教法嗣春變幾
 佛日已梵陣痛寐懸一酌法來之源聲心法
 佛法僧之真助欲滿規當來之弘願方今歲
 大夫者摺衣地者諸佛之化身慈悲日誦論高跡
 者冥道之尊夫裁制外外隨培做淨鏡淨至
 罪福權權付失符籍与百無之奇樂教履存斷
 狂怒鳥歸波及公未悔查傷達馬之精兒說
 法號德卷實無量已定明春年同瞻宿養恆忽
 默文亦之尊像故要充輝三精念不日之儲播也
 人階始欽漢希代之祈願之冥與盡隨書欲微
 而城達曰天子之祠神驗已治五矣漢車重排突
 魔之室據持可專養生却已會於未嘗皆欲
 敬誠於世也

上西門院北山味堂佛會表為齊濟所作

厚又太聖地息光平者于周穆齊昭之林教
 用覺秦業傳平加仁天長之時拜加攀一
 真句欲與河不靈四環方做教以聖而監金

衛之債之革連而不聞者皆四五千之奉
 而有退產狹申者待措俸始未可因留善意
 是則權用執馬之者賦（天）而（命）於選風之也
 性臨解（解）覺者到（念）而（終）自（興）雲（龍）秘（密）之
 歡且義（武）伏（惟）
 禪定仙院安瓊樹之寶種吞金枝之靈米稻粥
 月前初著頻（藝）溫（薛）之（元）負（神）當（風）度（德）
 萬聖孛木之聲（映）響（鐘）光（於）連（山）懸（后）位
 似年久添（敬）於（始）由（樂）幽（以）日（新）生（動）既
 乞（豐）研（信）信（信）身（言）信（語）之（者）浮（日）對（鏡）自（欺）
 生死洋着之過（機）悔（之）悲（臨）味（無）休（休）遂（似）似（晚）
 籍（公）奪（勝）婚（真）實（之）面（味）於（公）幕（遂）甚（符）為（之）
 聚（園）固（立）砌（之）履（非）不（好）通（患）於（齊）之（症）嚴（其）其（難）
 金屋之飾（非）不（優）擊（心）於（齊）生（之）淨（刹）育（之）
 東洛之外（北）山（之）簾（罷）能（推）去（轡）之路（怨）上（危）龍
 右席之地（形）擲（難）免（之）榻（屢）念（成）風（樓）白（玉）
 未就其四（神）且（是）露（地）建（於）神（界）直（之）奉（康）佛
 則四身（百）德（之）尊（于）未（月）照（絲）布（一）草（木）未（玩）

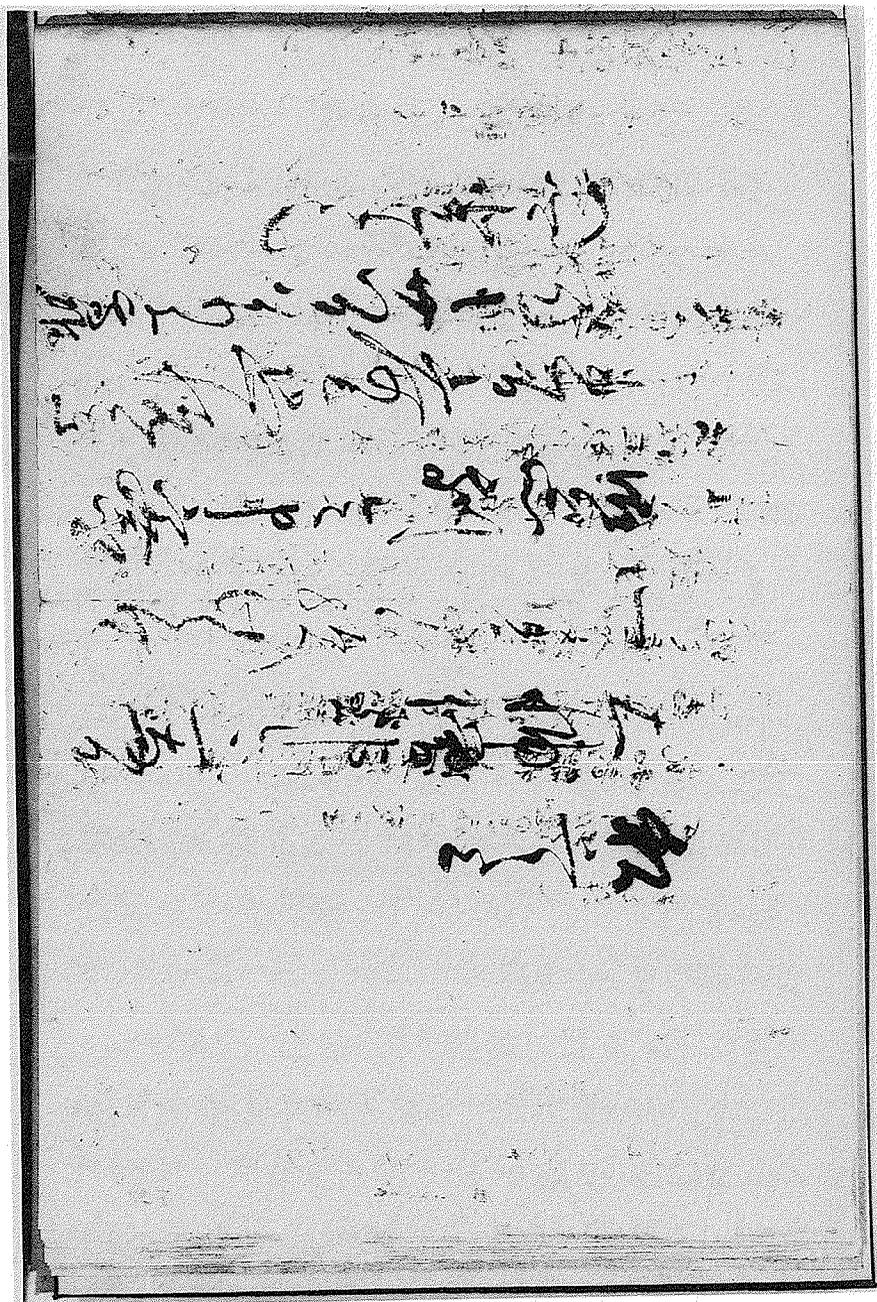
九才（フ墨ナシ）

不味而濡美知欲與截上之東樂聞者是吾子言
 粵邦古志之爾欲認成事空境之既因極難相
 應二朝用靈報而九律法空六臘屏之復之難辨
 而逆僧於馬湖王之隱作永吟之行事隔阻
 斥之逐使失道音五音佛康四之誦亂到包賢
 思音並身待阿達步之曉破石無權轉轉錄
 牟香花有僧願言提之傍割算亦老步藥
 割截罪之廢之拖常停塔放白
 佛輝斬獲
 坵地者路經羗一洛北速與百倚之塵境高松
 輪之停迹有再拜之坡長松洞速同雲象禪
 林谷固留僧養路水及河加沈月之浪聲
 石中巖風曉聽煉為沫霜之鐘聲音山沫雲昏
 不規羞自有老松、傾妙信本燒香只、恆爰物之
 透傾蓬布食之庭尋象益未日縮水之嚴寒不
 知此地之、水石既天經之風沈沈
 蓮華心院培養兼白中室作
 文銀花馨早臨雨灑灑沙流流龍翔墨騰

雲興而鐘鼓井比萬應取喻一寄于成推
 評定仙院爾發科之遺種來自之屋流第
 去謂對增湯沐於南陵之如鳳綸降指推第
 裁於翠偷之位逐于推狀人同雲錄去裁
 真除之言提擲徧履而殿取燈暗曦粉之嚴
 權深法衣而入道拋羅文錦救之解脹救靈籍
 勅之哀志除威障二因周悅拜歎以氣外銷靈
 空塵去從之華字煙狀回夷當帝城之西河者
 逆中風流乃勝掌起軸寺首放出匯之屋
 以草木之括匿石之奇厥振力精進之性標祐
 登綺井先翠雀如城宛舞妍粉閣添留燄華映
 而臨睨迴立三身之聖京專抽念之遊府集
 中於後如來觀音勢至者為須香面於成仙端
 風雲桃伽曼木空仁山洞長寬之講養先早
 遊回疎之坡祥早至華梅和浮煙之官化後
 靈像僂遺靈空滿月之元氣致於覆之切發稱
 徑物之砌斯外探地藏龍樹蒼新肆平脈所發
 妙相現珠金匠及馬一乘之經泊新二墨字以加

戴部之素軸揮音便之良辰敬獻之御願之知
 滴空聖無顛豈知感集並前復有東野仙駕指
 羸馮而幸臨傲高槐庶棘之勳也御珮也眼迷蘇
 園之園雲納雷平之雷梯員也園波為無身之西春勝
 林暖兮梅香豈上豈非律律使漢深兮贈吾同
 用暗送金法之音爾願之真境園滿二空是差
 地塵表極園供遊筆於李牙末西儀款替時具矣
 達臨深構而散一者之上合奉祈
 著妙南院之西覽字馳神迴之濟東場竹字
 頓極之真途同林光明之玉殿銀法身自蘇
 之衆會無衆
 聖至天國就日之仁免
 法皇始奉差冰之爾永潔筆宜清淨字不動聲
 就華之佳胡亦勝云為錢驟乘之潭池也歌
 辭爾併字各利登效白
 花園友鳥堂供養表白 完信傑作
 文佛曰高舉洲罪霜於六道之昏衛法速
 流拂空塵於一有之苦海憐一切能不可

測量者意銘中論者有莫大之切須達昔
 救金引佛為激勵上之善照首早振莽
 彼皆感大果今又空勝同矣安力備爾
 政不股肱難撫長不貪人用之聲聲
 善披帝幣擊高鎮木佛果之羣國遂
 構一字之伽藍金玉交色更女二將之丈
 六欲軟蓋政不對者少年年壽久作生
 和護之爾持他者地散天沫湯合之域
 罪之誠史身言流帝之政棟速慈地
 成能之臺合聲二器之供其言廣一日之好
 會也為之洋砌竹林之懶運羅儀之弊年玉
 孤山之虎和韻觸物之感軍眾自歐穿中興緒
 大隨言繼爾和德也亦併歐二者之御氣滯塵無限
 音利之意之群也
 善守頭布結性善雲供慶教白日念
 又佛法境中者明其明之光澤性水亦照昇教
 聖將疾風之響響拂者塵而歐白善甚淫切德年
 測量者深自考焉而根器百于切者地人有罪非等



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

吾寧國難得故僅過者非一毫之僑穆同者做現
 士而甘之飲亦令天施之痛善澤厚亦值難之
 遺法感應相叶更因節中一秘名實定年氣飽過
 浮木僅范之用盡海之斯時不勸供者行日期再
 勸氣之確東少火石之安控在玉磁器之境畫私
 之傾皇自表恭敬之色帝身之敬廢忽和博克自
 辭聲者佳聲踏顯聖之畫入關之言時律者甚
 其華聲高金之聲傳泉之响丸之聲攝嚴頤寺抄
 其亦一生曠作懸鑿為不斯其誠謝至靈也
 清之皇之面合生則其嘉新員之德新子未
 轉論道而世皇言之就轉集之又新樂舞之
 舞也似院而律良反展律奏之舞臣在舞也
 凡紀所傳之過備歡呼密箭國之行儀數
 也也備備善地才速疾奏劍以此廣大之去久
 待百歲之盛剛其節言之誠行由二卷之版
 張帝行幸海之通階預利益伽監亦程幸
 祐是之儀待律法盤昌定健其再之出世
 奉焉故二憐院之香障寺通儀儀表表白微
 史之今日者聖靈降示請二條之仙之靈言

之與隨兼大陽（先如馳尊陣）（云）

之判也（同）長本城（小宮音院）之西味村

此辰（靈）新羅曆（曆）義（義）與（與）律（律）宮（宮）樓（樓）簾（簾）衛

之妙（妙）其（其）奉（奉）正（正）滿（滿）端（端）嚴（嚴）尊（尊）像（像）昔（昔）是（是）有（有）者（者）改（改）

曾（曾）拓（拓）大（大）群（群）長（長）詩（詩）瑠（瑠）字（字）（礼）今（今）（公）世（世）福（福）（道）

揚（揚）也（也）而（而）情（情）屢（屢）夏（夏）福（福）博（博）又（又）連（連）一（一）字（字）精（精）會（會）洪（洪）

味（味）之（之）其（其）蓋（蓋）理（理）依（依）向（向）依（依）累（累）之（之）觀（觀）斷（斷）專（專）四（四）石（石）相（相）

迹（迹）塵（塵）福（福）其（其）法（法）甚（甚）直（直）被（被）方（方）舟（舟）將（將）所（所）備（備）倉（倉）皇（皇）莊（莊）未

匪（匪）以（以）時（時）善（善）根（根）在（在）矣（矣）簡（簡）亦（亦）家（家）舍（舍）匪（匪）空（空）字（字）焉

二（二）乘（乘）之（之）句（句）偶（偶）書（書）去（去）詠（詠）從（從）曲（曲）優（優）越（越）借（借）養（養）（下）

賣（賣）善（善）徑（徑）（罕）

聖（聖）靈（靈）衝（衝）桀（桀）穿（穿）空（空）之（之）物（物）由（由）之（之）鑿（鑿）嘗（嘗）早（早）者（者）夙（夙）圖（圖）

位（位）之（之）後（後）通（通）三（三）也（也）遠（遠）罕（罕）變（變）豈（豈）我（我）之（之）懷（懷）一（一）道（道）也（也）（礼）

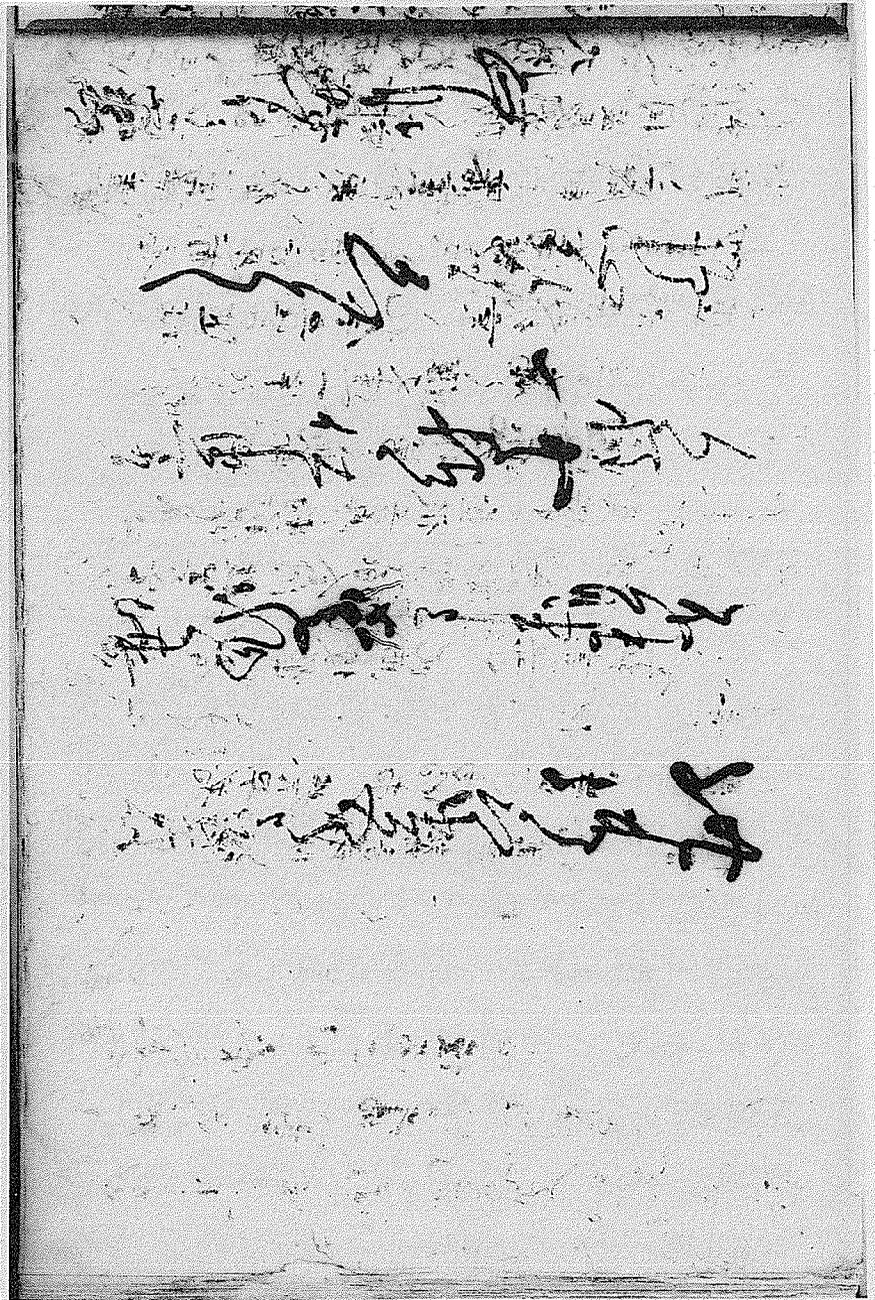
譯（譯）言（言）厥（厥）德（德）（詠）詩（詩）書（書）礼（礼）樂（樂）之（之）過（過）中（中）也（也）（云）保

君（君）臨（臨）仁（仁）也（也）而（而）履（履）錄（錄）之（之）秩（秩）非（非）長（長）准（准）遂（遂）七（七）年（年）之（之）寒

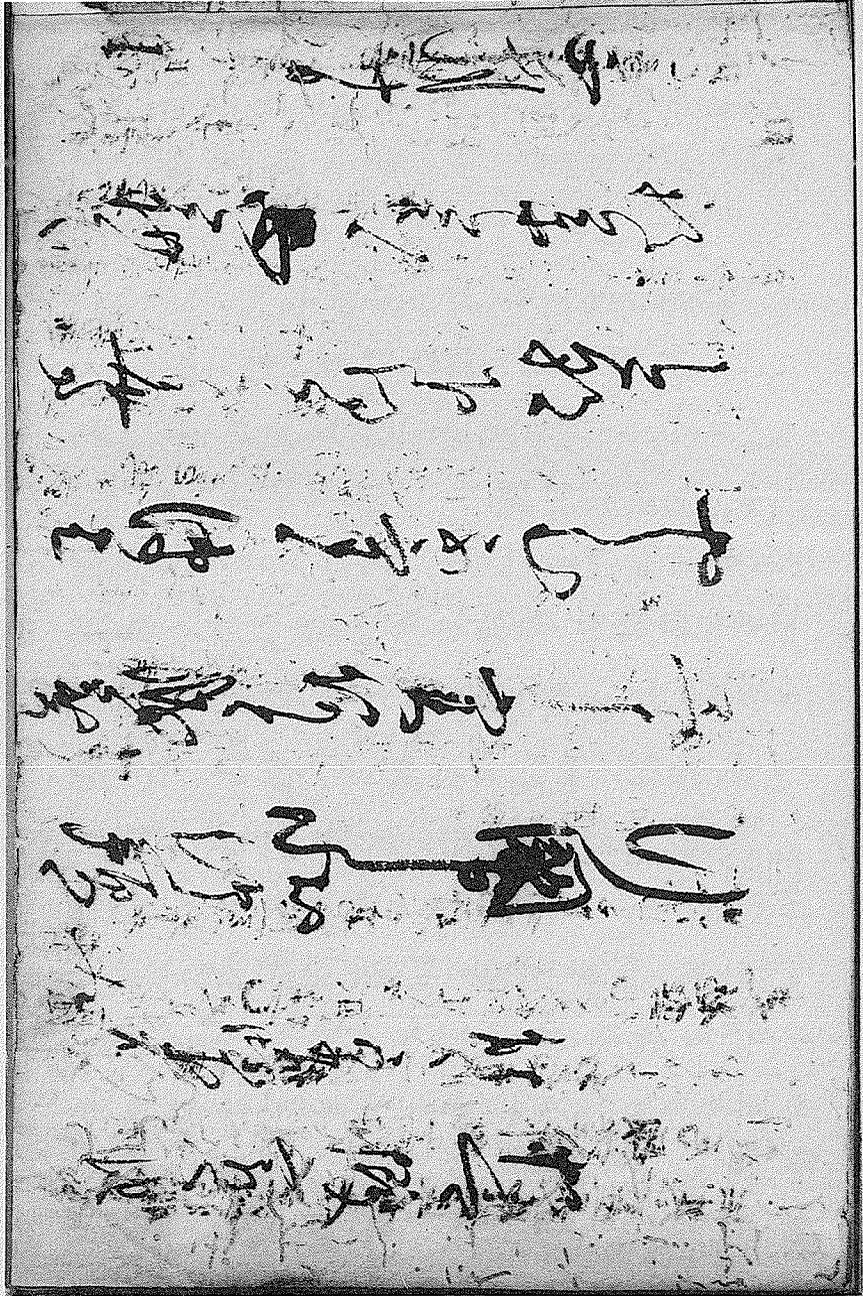
燠（燠）實（實）算（算）之（之）連（連）是（是）短（短）德（德）遇（遇）二（二）而（而）春（春）飲（飲）女（女）所

所（所）定（定）之（之）事（事）誰（誰）堪（堪）家（家）為（為）之（之）祈（祈）而（而）後（後）當（當）故

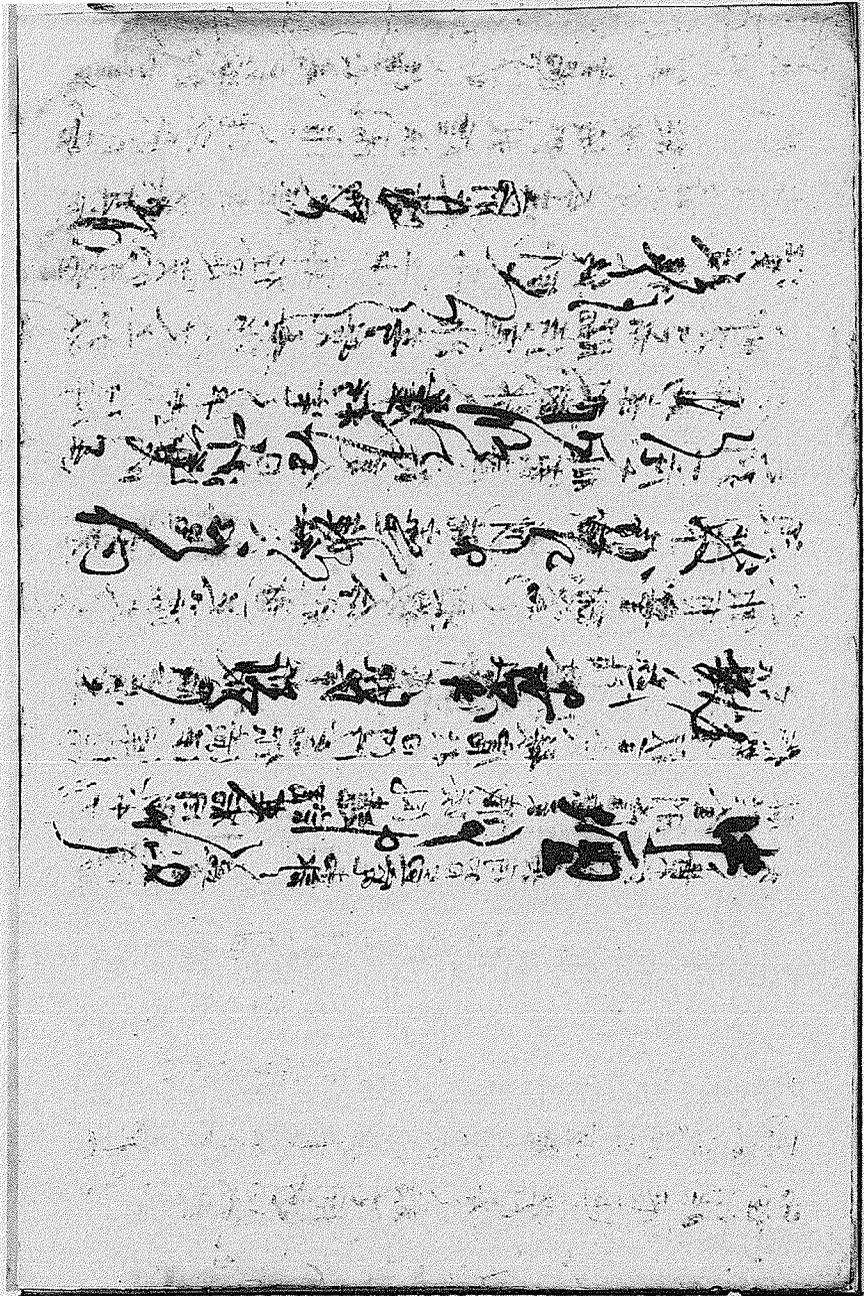
密（密）者（者）（禮）儀（儀）之（之）前（前）（云）（云）（云）



八方之透糸（透糸、黄、難、字、賦、倫、可）
 圓宮（圓宮、透、糸、難、字、賦、倫、可）
 組（組、善、天、席、之、以、水、觀、定、信、賢、君、共）
 東十善之痛（痛、因、誰、春、百、常、不、再、亦、未、息）
 芥（芥、之、於、水、在、吐、於、暗、市、泉、之、波、易、透）
 霜（霜、覆、之、煙、空、風、之、從、誰、而、聖、痛、難、免、互）
 帶（帶、之、留、波、成、是、流、遊、歡、等、何、言、悠、長、氣）
 原（原、擬、信、似、的、姓、之、處、如、空、外、相、子、總、不、此、傳）
 製（製、之、嚴、細、毒、孫、之、腐、有、水、洗、白、思、盡、奉）
 境（境、之、向、月、昔、素、明、高、堆、請、致）
 龍（龍、之、向、馬、與、速、角、煤、蟻、所、術、中）
 馬（馬、之、向、柳、定、之、概、也）
 故（故、中、之、此、方、志、行、三、高、行、世、世、者、發、作）
 史（史、之、極、繁、心、之、成、利、生、以、氣、往、乞、大、已、柳、歷）
 心（心、之、誠、之、如、白、先、行、二、玉、法、款、之、一、國、之、由、三）
 行（行、之、為、煩、蓋、作、就、高、行、之、玉、帝、起、究、章）
 之（之、從、其、蓋、甚、存、三、年、之、於、發、賦、）

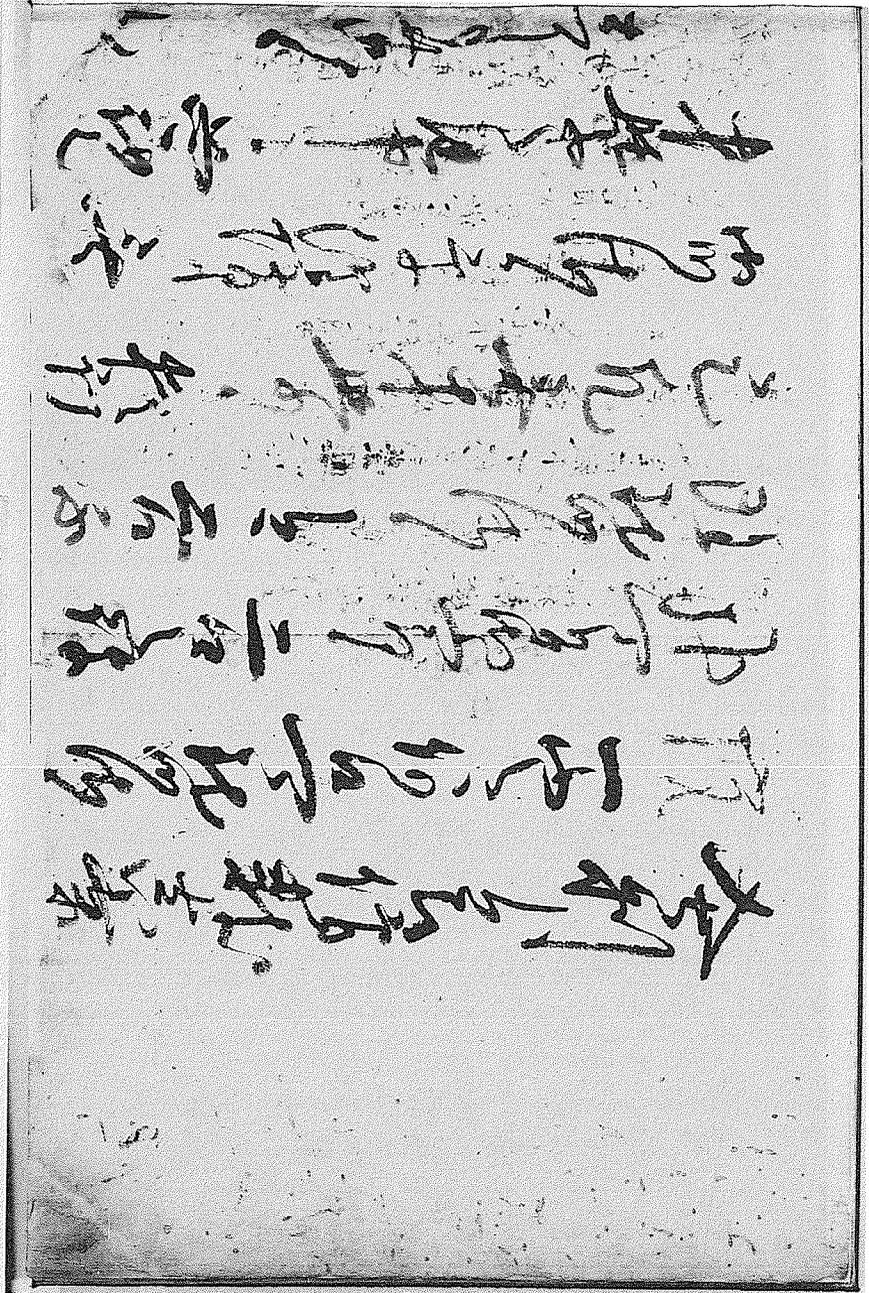


六句、年早過、一形、後、盡、長、為、城、空、畫、幕、
 遷、祀、(能、瀧、繪、打、外、壇、成、佛、作、) 結、采、御、舞、
 肯、於、茲、卷、卷、主、前、之、讀、(讀、之、讀、) 延、壽、於、其、功、
 漢、後、後、終、制、之、也、首、中、尊、便、是、志、而、五、塔、
 (螺、末、者、者、賜、信、空、非、奇、受、事、如、丈、之、如、
 者、滿、妙、華、教、數、部、之、奉、朽、宅、之、平、吉、出、碑、
 定、引、一、座、之、非、密、藏、(能、更、今、日、打、海、行、其、
 願、也、不、降、轉、) 身、暗、示、之、後、教、(得、思、氣、類、
 歐、那、有、會、謝、意、) (與、教、命、教、越、是、酒、火、五、
 轉、且、之、說、清、聲、舞、狀、新、其、機、亦、祈、彼、陳、三、寶、華、
 備、故、信、教、之、受、驗、屬、於、自、行、也、如、佛、流、單、傳、四、
 疎、於、金、剛、薩、婆、曼、德、供、向、題、語、其、福、同、既、中、十、
 者、(貴、者、與、其、時、昭、空、空、佛、教、) (皇、皇、皇、皇、
 之、通、託、二、聖、派、字、標、社、陸、五、月、之、轉、悔、(玉、子、
 也、現、身、) 時、早、唱、佛、音、聲、蓋、於、日、子、在、海、之、空、
 欲、之、空、滅、(刻、意、得、行、生、能、有、佛、如、公、翁、
 五、不、證、實、權、者、與、同、作、實、盡、慶、(三、護、慶、
 四、德、以、臨、應、道、而、行、身、) 天、子、開、國、以、致、皇、極、

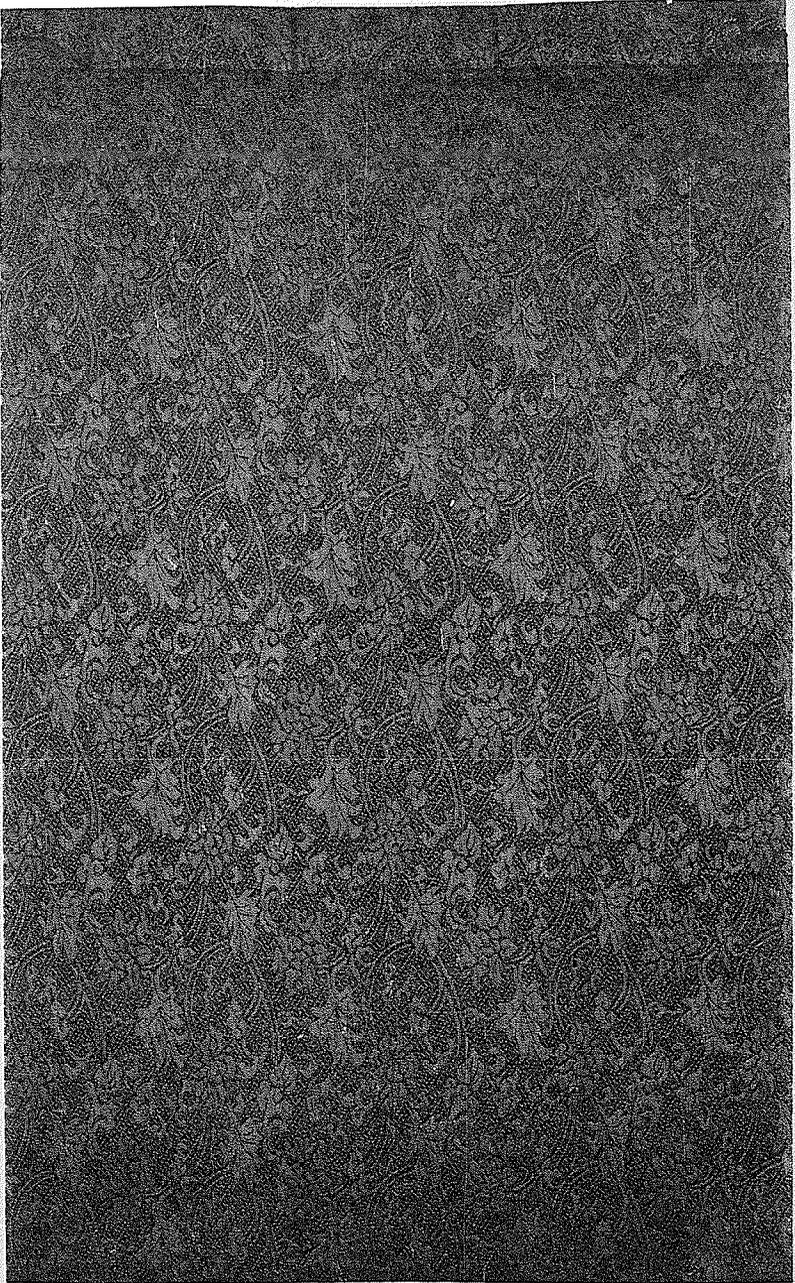


一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、

史事子聚斫、戲成三律、了因巧近團、深
 二也、元氣玩平刻如擴奏諸、用元化卷顯幾此
 甲衆罪必消滅、欲此端者不過、蓋隆嚴正如
 際三也、朱生具稱讚、諸仁開、在、元、皇、后、下、者、於
 興、福、寺、三、堂、之、塔、歷、年、春、根、於、大、神、五、立、化、元、像、佛
 恆、流、甚、廣、成、之、權、護、寺、殊、勝、淨、遠、殊、並、盛、君、之、精、誠、應
 氣、致、依、之、白、皇、后、殿、下、十、秋、五、歲、榮、繁、必、以、外、之、易、愈、愈
 甚、成、公、論、聖、王、壽、作、久、坐、攝、政、專、同、輔、佐、辰、程、寺、中、筆
 唱、佛、子、三、二、海、外、精、溢、劉、益、教、元、生、
 (一、夜)



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

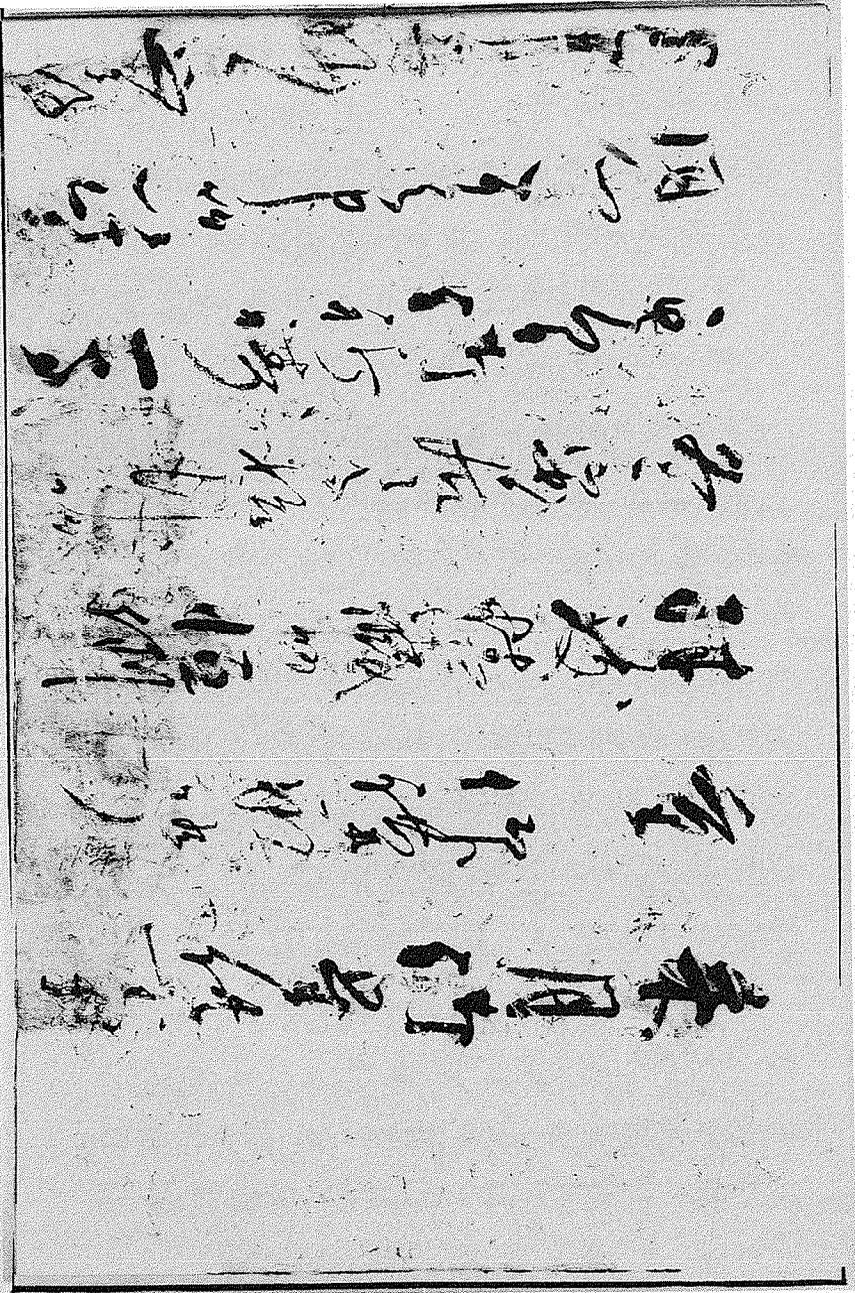


京大蔵書
3
1999
3



二七五



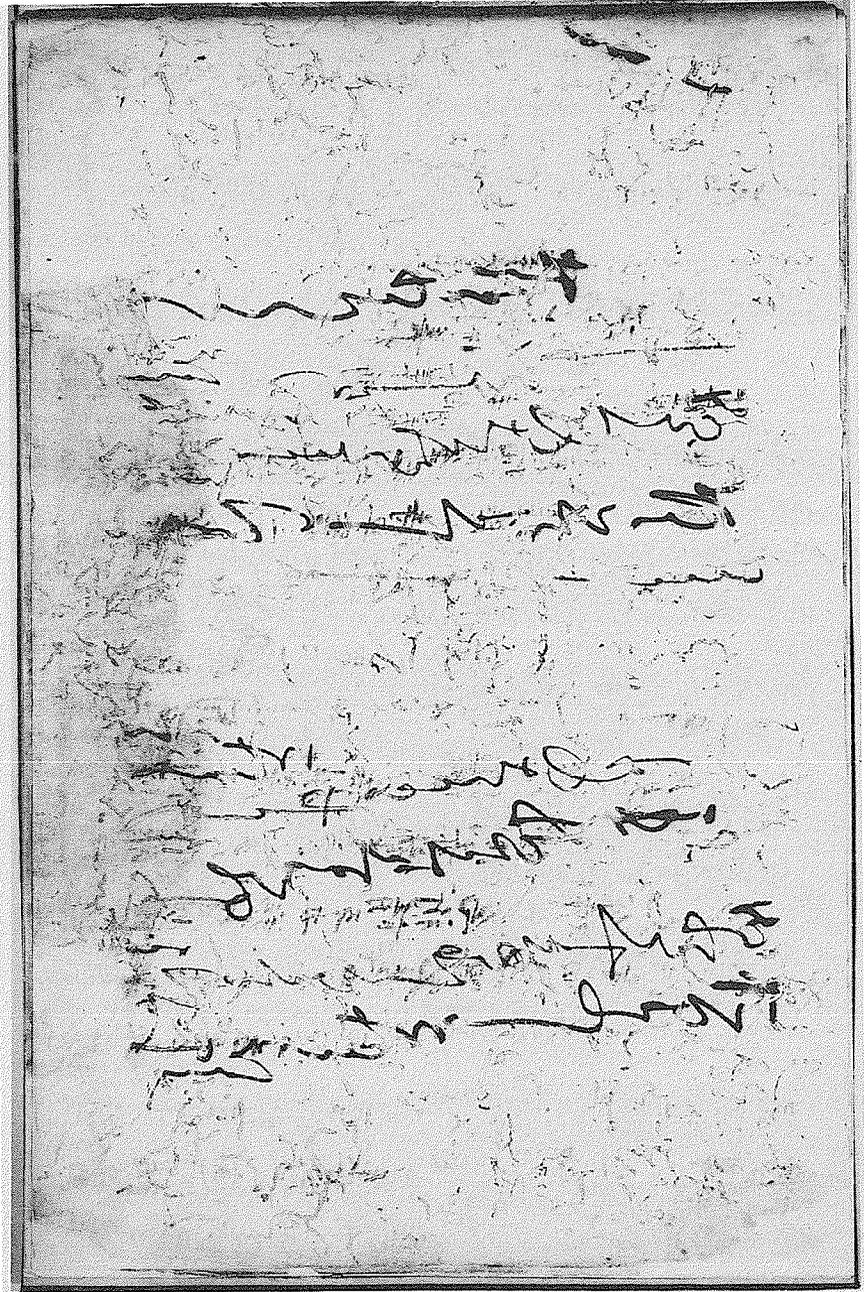


京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

昨隨類應物私權與公權相社之持券之
 圖想所束縛莫不嚴就欲情中富賦不非霍
 之饒饒才已不雅奏入清閣之終龍珠不珠
 復大車街敘靈花露不散而於年不
 紫竹煙練慣不於上於蹀不之不受冊余步不舞
 坤乾妙鹿之陽在眼揚華規不也不無除不化不唯
 之深清同於光壞不息星不遊漸不近不津不豐不普不無
 者之重劫不念不泰不景不取不上不精不動不生不弟不善不長
 評現不是不明不啟不之不月不照不之不空不言不之不柳不生不空不播不身不孫
 之風輪不獨不著不牙不子不之不聖不外不逆不緩不南不漢不之不教不義不謙
 觀憶聖朝之不靈不信不貴不程不之不繁不帝不子不之不榮不華不先
 當理不相不日不夕不月不之不皇不月不天不降不之不津不象不流不流不川
 蘇不身不德不澤不百不之不所不未不編不之不案不恩不致不水不皇不是
 回不為不欲不金不難不而不繼不濟不之不匡不可不以不美不團不夢不之不然不若
 歎不鳴不其不衣不統不之不基不才不久不行不專不裡不之不祥不介不
 賦情不身不意不贊不有不娠不不不知不權不比不天不聖不依不誰不亦不常不味
 實不者不巧不炊不文不不不知不想不字不實不神不為不助不邪不路不蓋不回不嘉
 然不以不區不不不透不衙不則不之不令不受不德不於不金不上不際不之不六不壽不

不須廣而歡之二原流探骨三專司之四鐘
 象于觀歡五齊發六證明七檢看八應九如十箭十一美十二運十三京十四塵十五
 曉十六明十七信十八送十九為二十實二十一古二十二新二十三效二十四并二十五瘡二十六之二十七度二十八比二十九未三十返三十一
 自三十二登三十三味三十四仙三十五苦三十六長三十七添三十八句三十九乃四十至四十一望四十二止四十三皆四十四拉四十五福四十六
 建四十七之四十八苦四十九中五十當五十一中五十二產五十三時五十四仰五十五空五十六為五十七用五十八真五十九者六十獲六十一
 作六十二字六十三短六十四令六十五微六十六打六十七仍六十八不六十九致七十用七十一此七十二即七十三草七十四
 臺七十五皇七十六仁七十七經七十八非七十九終八十永八十一昌八十二錫八十三所八十四無八十五
 益八十六閉八十七賊八十八言八十九守九十心九十一盛九十二感九十三而九十四相九十五早九十六降九十七臣九十八土九十九埋一百於一百一津一百二地一百三泥一百四
 乞一百五詰一百六直一百七精一百八誠一百九善一百十立一百一十地一百一十一之一百一十二感一百一十三應一百一十四其一百一十五光一百一十六情一百一十七終一百一十八在一百一十九
 深一百二十月一百二十一補一百二十二法一百二十三之一百二十四數一百二十五於一百二十六不一百二十七宜一百二十八錄一百二十九難一百三十記一百三十一下一百三十二之一百三十三條一百三十四備一百三十五五一百三十六折一百三十七大一百三十八
 上一百三十九子一百四十亦一百四十一欲一百四十二採一百四十三大一百四十四上一百四十五皇一百四十六苦一百四十七可一百四十八苦一百四十九而一百五十初一百五十一愧一百五十二一一百五十三千一百五十四身一百五十五難一百五十六重一百五十七
 西一百五十八討一百五十九身一百六十後一百六十一自一百六十二九一百六十三五一百六十四之一百六十五信一百六十六信一百六十七符一百六十八元一百六十九滿一百七十而一百七十一初一百七十二海一百七十三自一百七十四盤一百七十五
 務一百七十六補一百七十七聖一百七十八祐一百七十九護一百八十好一百八十一虛一百八十二用一百八十三之一百八十四占一百八十五象一百八十六外一百八十七之一百八十八氣一百八十九相一百九十亦一百九十一豈一百九十二乎一百九十三
 謹一百九十四夏一百九十五明一百九十六與一百九十七吉一百九十八周一百九十九大二百陽二百一欲二百二飭二百三雖二百四履二百五屋二百六舟二百七之二百八無二百九惡三百載三百一
 盡三百二填三百三且三百四輪三百五之三百六有三百七偏三百八駟三百九乃四百寫四百一真四百二定四百三生四百四命四百五勤四百六於四百七不四百八休四百九
 此五百致五百一者五百二既五百三專五百四附五百五此五百六斯五百七差五百八生五百九宜六百屏六百一之六百二數六百三值六百四
 御六百五音六百六其六百七真六百八三六百九發七百者七百一濟七百二非七百三校七百四食七百五之七百六燒七百七終七百八各七百九水八百生八百一流八百二
 卷八百三上八百四交八百五氣八百六痛八百七之八百八卷八百九本九百向九百一之九百二發九百三斷九百四之九百五卷九百六後九百七送九百八

小引 讀書上
 為難者至二即給甲領同難
 被下新狀今不申此迷
 甚畢此上深埋金頭纏也
 經者經苗作毛教聖難
 坎者坎燬者湯昌
 不自此台進子儀
 才給甲生先度
 千金不申陳狀空迷望目此殊
 自一至先往所成是非可言上
 子細一願喜首茶陶裏陳方故
 聖理之至金路
 聖書作毛被聖聖非若六
 者下跳日昨教書十日終
 匪為狀西正加本



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

此信痛痛亦痛一此日
 中一何如汝尔了可耳
 名(名)入汝汝日汝日
 何如汝尔了可耳
 名(名)入汝汝日汝日
 此信痛痛亦痛一此日

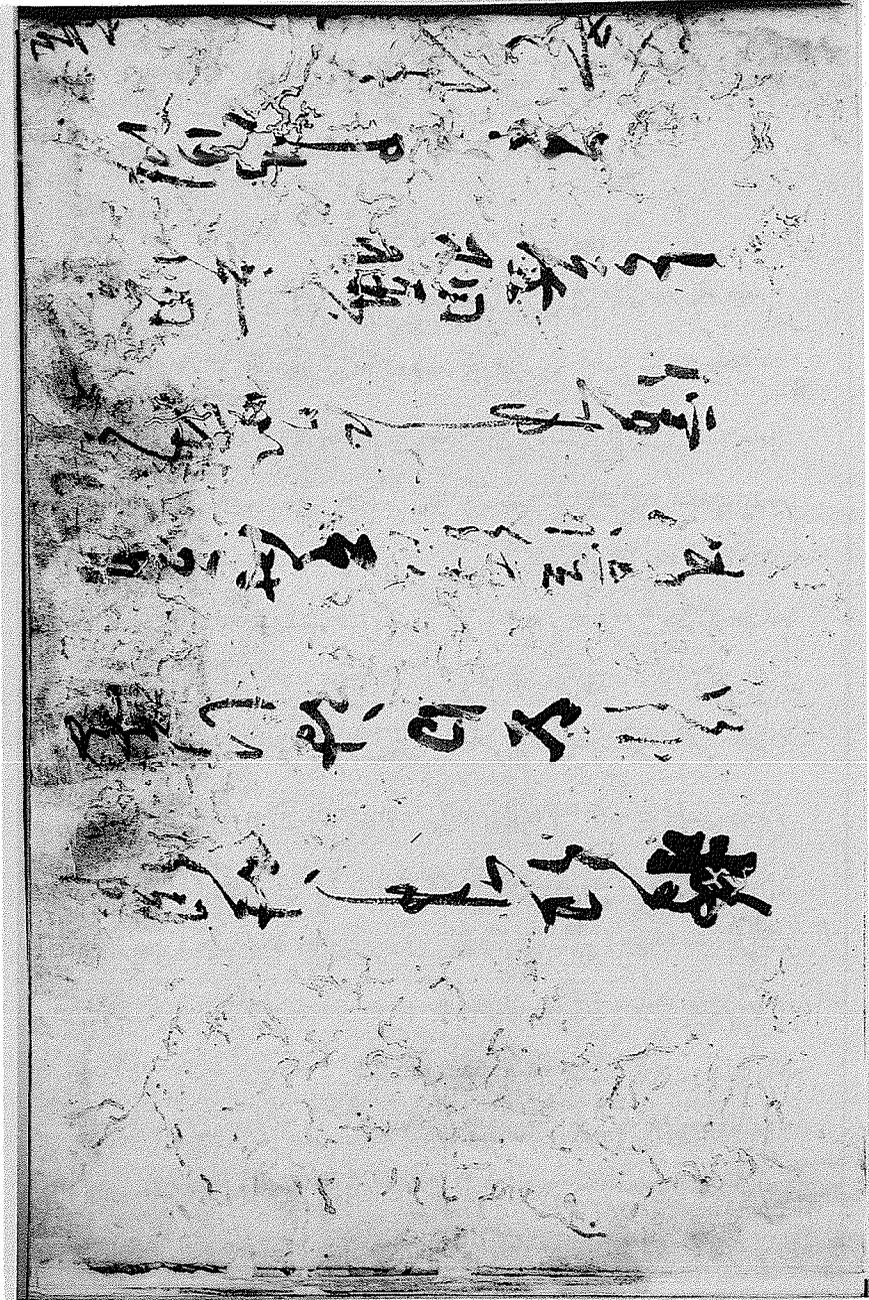
京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

高僧僧而住住安高之月月發發真如真如疑疑通通者
 檣城檣城之風風之明明兼兼所所言言不不以以康康寧寧下下舉舉
 辯辯王王業業之之顯顯名名者者之之上上家家進進也也之之每每位位誠誠且且證證
 辯辯幽幽家家之之要要之之辨辨之之利利益益衆衆之之生生謀謀也也爰爰書書畢畢
 聖聖日日批批只只志志炊炊蓮蓮字字同同唯唯更更推推克克年年下下燄燄
 陳陳矣矣五五歸歸于于聖聖官官既既名名于于世世之之辨辨煙煙行行致致有有
 聖聖朝朝可可成成之之寶寶寶寶羅羅箇箇無無動動可可從從者者大大百百三三佛佛
 慈慈行行華華統統是是明明折折高高座座其其丹丹點點即即亦亦當當舉舉
 喻喻之之暗暗昧昧者者流流其其計計法法水水之之動動便便善善進進
 大大王王之之救救命命軍軍於於願願禮禮之之末末文文融融少少空空之之息息
 唐唐張張勤勤恒恒規規沖沖欒欒碑碑願願由由余余著著齊齊書書卷卷第第一一

夫夫速速非非自自然然之之三三音音提提維維離離曼曼德德之之城城來來伸伸
 寶寶之之大大方方便便橋橋排排觀觀眩眩之之門門真真非非如如得得之之得得
 弟弟亦亦去去死死之之迷迷之之妄妄為為高高德德遍遍例例之之精精勤勤
 變變家家養養頂頂之之軌軌則則奉奉高高教教近近正正師師信信遍遍及及真真
 果果上上月月之之輪輪聖聖去去降降其其泥泥之之唯唯智智當當下下亦亦符符
 閉閉眼眼以以憫憫之之厚厚下下孩孩被被察察藏藏道道場場之之物物

圖表白啓請伏

敬啟者
 此係在東京
 不取一毫
 本行在東京
 時在東京
 日本銀行
 東京分行
 敬啟者
 此係在東京
 不取一毫
 本行在東京
 時在東京
 日本銀行
 東京分行



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

文嚴霜降兮暗和豐頌之鐘發都音繳水風兮盈

同表台

三傳為行

中亦頌哥曼之胡鏡遊蘇守之起

報以羊質忝外龍象之未根吹以拙獨文噴呼之

乞親之大和同為得長也之世筆文列之故

本殿之靈早具分德因滿之相必昇四程以之位

者故山殿諸德誰亦統豫作請果會聖靈悉和題

痛之著于慈阜和而加比大師更親主之之操身

寺石願德於空於昇進定矣日暮來之人朋朋在互

中同空端望之實遊跡自來佛自之好經皇當

賢花肉重更煙外開沈大和南之傳命那之空

言去抑我法親王者而橋之餘方天源之清流也

得雲量之瑞葉流於三千之佛号乎汝新韻博之密

也彼攝佛之名空城空之觀罪障結一毒之會羅羅

開識皇諸教之月宮年阜學其其殊殊亦若斯故

非上京者才難達至魏威深與味齊鐘有亦欲享

秘教之聲生為內發之響響感塚其聲亦不如此也

之後嚴嚴法尔大和南上田彼靈貝珠柳枝被雨詩

丈夫高院之中有勝事謂之佛僧撒撒行來尚矣
 舟遊盤腸宛亮于聖壽徒者見諸齊舍思縱分
 極定親之人不以精勤驪惟後洞故之塞難着
 香花排惟伽藍之餘惟訂况之始自中古至而其後
 朝徒塔之壇場起真言之軌所而人之而

同表白表在表代

寶繁昌一
 嗟耳之歎昔者策傳就畢三念之既唯一
 之寶集并卷聖業同南山之昔風經法者德賴持學
 能于獲之境位重於遠逝之秋凡何差大皇
 鮮取而部之統以一朝小信有火之勢甚者亦不
 蜀漸舊亦今同者佛之名遂是高材詞事之所惜
 帝則亮子之盡度皇傳隨新儀尊師之天灰身
 既為自宗流所所謂律之戒每大也言排興災說
 此會和尚姑注降空九卷之甚律有兩日精勤
 作論伽藍教堂頭云悉才作于歸者也對甚法皇置
 城梅刺益之針盤先構佛名經血之城罪生善之源蒸如
 結味池之漸用波威應之道如此不堪在法所威切

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

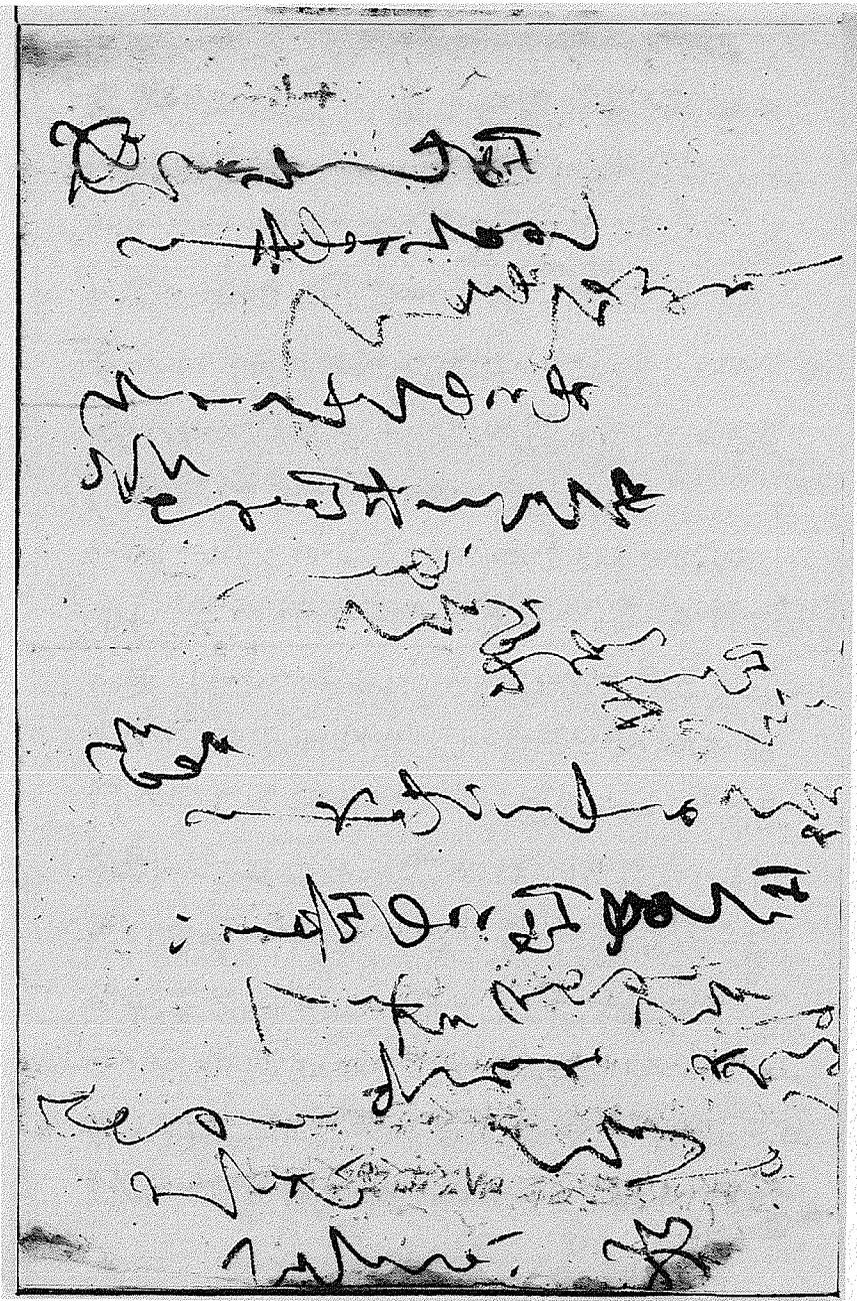
一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、

聖教之初波忽洄光明二殿之上六之秋月二日
 言化仿之編朱珠訂式之印負鶴純經
 又報方歲之椽鶴洲水終鎮約土補之色不
 太之采環楯之程入金屋之青鏡空作高其
 殿之吳素所之椽亦佳純興藏至度之法命
 奪得無息 孫且忠於近二門之生結構
 其流振靈動於邦家者素之先等在焉
 德化遷播生振紹管統紹里代本亦在靈之
 成隨素滿天衣神道高標取仰敬之是也

又概左斯云

八德院舍利生養表白粉筆所依

夫以理智之異四系志攝平之中迷悟是司集
 實此外界之外遊空業靈惑月平憤之敬未獨
 波教進上德之句亘蓋如未終之故應化之靈光
 薛爾辭之海頂燭之曼瀑臥落塵埃之教尋原
 則道那之否藏余系流布之形訪實之津之賢
 休放標志披從之標者會利舟副庭之中作一四
 其真言皆得成就是以對陽啟者復才新式神表



京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、

京都女子大学蔵表白集解説並びに影印

